
全ての疑惑は目の前に

七英雄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

全ての疑惑は目の前に

【Nコード】

N7804A

【作者名】

七英雄

【あらすじ】

大人気グループSGMのメンバーある、アカケイこと赤石圭介が誘拐された。何のために？犯人の目的は？色々な思惑が飛び交う中、事件は予想外の展開を見せる。

第1回 始まる前のマメ知識

突如として日本に現われた5人組男性グループ、S G M。
スーパーグレートマシンガンズの略である。

誰も聞いたことのない無名の事務所デビューしたこのグループは、
瞬く間にトップアイドルの道を駆け上がった。

デビューシングルは売れに売れ、100万枚も困難な最近の音楽業界で、なんと500万枚を達成する。

しばらくして出たアルバムは日本新記録を樹立。

国内だけで1000万枚をわずか1ヶ月で成し遂げた。

その勢いは止まることを知らず、映画、写真集、全てにおいて新記録。
録。

ついには全英、全米デビューの話まである。

人気の秘密はルックス、演技、歌唱力、人当たりの良さ。

子供ようなあどけない笑顔に世の女性達は狂喜乱舞。

女性の枠を越え、男性達の悔しさも越え、全年齢層の圧倒的な支持を得て、頂点に立った。

まさに完璧なグループといえる。

その中で、特に人気のあつたのは、グループの中でも、歌も、演技も、スポーツも全てにおいて万能な、赤石圭介だった。

見とれる程の黒髪に整いすぎた顔立ち、なにより瞳が語るその視線。
通称、アカケイ。

数々の雑誌のアンケートでトップの座に君臨した。

彼が絶大なる人気を誇っていた。

彼が右といえれば例え左でも右なのだ。

わずか、17・18歳の若造が大きな力を入れたのだ。

ワガママな性格もたまには批判してマスコミに騒がれることもある。

SGMはますます絶頂の先へと進んでいくはずだったが。

アカケイこと、赤石圭介が何者かに誘拐されたのだ。

この物語はそこから始まる。

つづく。

第2回 アカケイは不安でたまらない。

‘本日、午後13時25分頃、人気グループSGMの赤石圭介さんが、収録現場へ向かう途中、何者かに襲われ、連れ去られるという事件が発生しました。警察では誘拐事件とし、目撃者の……’

大きく揺れたかと思うと頭が固いものに当り、小さい痛みが走った。赤石圭介の目が覚めた。

だが、目の前は暗い。

動こうとすると思うように動けない。

それもそのはず、手足を縛られているのだ。

口にはガムテープのようなものを貼られている。

そして、この移動音、振動。

この狭い空間。

トランクだ。

自分は車のトランクに入れているということを理解した。ぼんやりした意識の中で聞こえてきた、あのラジオ放送。

確かに自分の名前を言っていた。

誘拐？

誘拐されたのか……。

赤石圭介はなんとか手が抜けなかと試みたが、無駄な努力だった。

あの時のことを思い出す。

ドラマの収録現場へ行くために、いつものロケバスに乗った。

楽しみは共演する人気グラビアアイドルだ。

演技力がないとスタッフの反対を押し切って無理矢理出演を決めさせた。

演技は最悪な女だが、身体のラインはなかなかのもので、いずれ、モノにしようかと思っていた。

それ以外にこのドラマ出演の目的はない。

自分が望めはなんでも手に入る。

赤石圭介は人気も絶頂だが、間違った人としての考え方も絶頂だった。

ロケバスが急ブレーキで停まった。

「なにやってんだ！」

赤石が叫んだと同時に・・・。

そこで記憶が途切れている。

殴られて気を失ったか、とにかく気がついたら、ここにいた。

どこへ向かっているんだと、赤石は聞き耳を立てた。

僅かでも何か手がかりでもあれば・・・。

「なあ・・・」

男の声が聞こえた。

明らかに誰かに話しかけたはずである。

だがそれに対しての返事がない。

「なあ・・・おい！聞いてんのかよっ！」

男が怒声で言った。

「聞こえてるよ、サトシ」

深くて低い別の声が聞こえた。

つづく

第3回 イクオは静かに運転したい。

サトシの怒鳴り声が車内に響いた。
うるさい奴だ。

車を運転しながらイクオは心の中で呟いた。
初対面なので、元々話すこともないが、話したとしても会話が続かないだろう。

誘拐事件という大胆なことをしてかして、簡単に会話など出来るわけない。

サトシの投げかけに反応しないのはそのためだ。

後部座席でサトシは怒り、ようやくテツが口を開いた。

「聞こえているよ、サトシ」

テツが助手席から振り返って言った。

「そんなに熱くなるな」

なだめる様に、だが睨みを効かせた。

「だ・だってよお・みんな無視なんだもんな」

熱しやすく冷めやすいタイプなのか、サトシは怒ってはみたものの、すぐにトーンダウンした。

最後には声が小さすぎて何を言ってるのかわからなくなった。

「……で？なんだ？」

溜息をついてテツは聞いた。

もう振り返ってはおらず、前を見据えていた。

「……いや・大丈夫かな・…と思つてさ」

「なにがだ？」

しばらく言うのかどうしようか迷った後、サトシは口を開いた。

「あいつを・・・こんな・・・誘拐なんて」

「あいつ」というのは、今この車のトランクにいる、トップアイドルのことである。

我々は、世間でも最高に有名な人間を誘拐したのだ。
つい1時間前のことだ。

テツは振り返った。

今度は明らかに怒りに満ちた顔だ。

「今更何言ってやがる」

抑えているが声に怒りが混じっている。

「じょ・冗談だよ！冗談！」

慌ててサトシは訂正し、窓の外へ顔を向けた。
それからは口を開かなくなった。

車内はまた静けさで覆いつくされて、イクオは運転に集中できた。

つづく

第4回 大路公康は情報がお好き

街外れにある事務所の中で、ぶつくら太った男が、イライラと煙草を吹かしていた。

S G Mを束ねる事務所「オージ」の社長である大路公康は、怒りのあまり、その煙草を灰皿には入れずに投げ捨てた。隣にいた秘書の大谷明が急いで回収した。

「警察からの連絡はまだかつ！？」

口から飛び出した唾液に気にすることもなく叫んだ。

「はっはい。今のところは」

ビクツと身体を震わせて大谷は答えた。

「……一体どのどいつだ……」

大路公康は呟いた。

サラリーマンとして時間を惜しまず働いた。

元々貪欲だった大路は会社に使われるだけで留まるつもりはなかった。

着々と自分の将来に必要な人脈を作り上げていった。

逆にどんなに昔の付き合いがあろうとも、先の見えないものは切り捨てて生きてきた。

この仕事を他所へ渡されると倒産すると泣き付かれても耳を貸さなかった。

あくまでも自分の利益のみを考えて、他人がどうなろうと知ったことではない。

そして、僅かな資金と全く光り輝かない数人のモデル。

小さな芸能事務所を立ち上げた。

大路の野望は変わることなく、日に日に増して、横暴になっていった。

タレントを売るためには、卑怯なこともやってきた。

金も積んできた。

きつと数え切れないくらいの人間に恨まれるであろう。

だが、実らない日々。

毎日がいつ潰れるかとの戦いの中、夜逃げ寸前だった。

そんな時、スカウトした高校生、それが赤石圭介だった。

赤石が連れてきた4人の友人。

これで結成したのがSGMだ。

確信はなかった。

しかし、世間はこの素人のような男達を狂氣的に認めた。

進み続けるSGM、それに伴って事務所の力も上がっていった。

大路の言葉にも重みが加わり、自分の望むようになっていた。

まだまだ力を蓄えなければ。

大路にとって今も昔も、私服を肥やすことしか頭がない。

自分を恨んでいる人間は大勢いる。

「誰がこんなことを・・・ウチの商品・・・赤石を・・・」
まずは情報だ。

何事も情報なくしては行動できない。

「まだかつ！警察からの連絡はっ！」

大路は再度叫びながら、机に拳を振り下ろした。

つづく。

第5回 SGMは認めたくない

「大路社長荒れてるな」

机に物でも投げたのか、自分の拳で殴ったのか、隣の社長室で大きな音を聞いて、七星亮太は言った。

「……だな」

隣で今流行の携帯ゲーム機の画面を見ながら、沖山誠二は七星に同意して呟いた。

「全く、迷惑な話だよな」

軽い言葉で場の雰囲気悪くしたのは、三井健二。

我関せず・とばかりに読書に集中しているのは、穴吹秋。

この4人と誘拐された赤石圭介を加えて、SGM。

高校の同級生ということで、赤石が連れてきたメンバーである。

遊び半分の気持ちでデビューしたはいいが、ここまでの地位を得ることになるなんて、赤石を含めて全員予想していなかっただろう。

「健二、迷惑だなんて、言うな。心配じゃないのか？」

長い髪をかきあげて七星亮太は言った。

「だってさ、今の俺達の立場ってわかってるでしょ？警戒もせずにはウロウロしすぎなんだよ。今や俺達大スターだよ。そこところ自覚しろって感じ」

大好きなメジャーリーグのチームキャップが頭から落ちてしまっくらしいに興奮しながら三井健二はお手上げポーズをとった。

「スターは圭介ただ一人だ。」

読んでいた本を閉じて、穴吹秋が強い口調で言った。

「……………」

「……………」

「……………」

沈黙が流れる。

沖山誠二のゲームをいじる手も止まっていた。

「俺達はおまけだ」

穴吹秋は立ち上がり、外へ出ようとドアへ向かい、ノブへ手をかけて。

「今のままならな」

そう言つて扉を開け出て行った。

誰も触れられたくない事実。

認めたくない事実。

赤石のおかげで今の立場がある。

思いたくはない。

だが、反論することも出来ないくらい、その事実は的を得ていた。

つづく。

第6回 テツの思いは虚しく響く

沈黙の車内。

テツはジツと前を見つめていた。

さっきのサトシの言葉が頭に張り付いて離れない。

誘拐して大丈夫なのか。

たった一言で世間にあらゆる影響を及ぼすことが出来る男、赤石圭介。

誘拐して良かったのか。

これしか道はなかったのか。

だが、今更後戻りできない。

俺には、俺達には金がいるんだ。

あいつの言う通りにすればいいのだ。

そのためにはどんなことでもしてやる。

それが……たとえ……。

たとえ……。

殺しても……と続けたかったが、まだその覚悟ができない。

テツは唾をゴクツと飲み込む。

サトシも黙ったまま外を見つめている。

自分の女の弟とはいえ、ここまで不安な気持ちになる奴を連れてきたことに、後悔さえ出てくる。

サトシが何かやらかしはしないかと心配になるが、これはサトシが熱望したことだ。

サトシ自身が付いてきたいと強引に言ってきたのだ。

テツには断る理由が思いつかなかった。

サトシも必死なのだ。

自分なりに考えた答えなのだ。

時計に目をやった・・15時。

計画を実行してから1時間30分。

目的地までもうすぐだ。

そこまでは何事もなく、到着させて欲しい。

テツは弱気に思った。

目的地まで後少しという時に。

バーン！

破裂音がした。

「うわあっ！」

運転していたイクオがハンドルを必死で動かしている。
だが制御不能だ。

車はそのまま近くの林に突っ込んだ。

なんてこった。

テツは舌打ちをして、車から飛び出した。

そして、真っ先にトランクへと向かった。

つづく。

第7回 アカケイの頭は痛くてたまらない。

様子を窺っている内に赤石圭介は思う。

犯人は最低でも2人、多くて3人だ。

まず会話していた男の声が2人。

2人は完全に確定している。

仮にもし運転している別の人間がいるのならば、3人ということだ。

怒っていたサトシという奴は、声の届き具合が近すぎたので、こいつは後部座席にいるのだろう。

対して、リーダー格のような奴は、助手席か、運転席にいる。

でもリーダー格が運転するのか？

そう思うと運転手が別にいるかもしれないという考えになる。

それよりもこの状況をなんとかしないと。

時間も、場所もなにもかもわからない。

突然、バーン！と音がした。

間違はなくタイヤがパンクした音だ。

「うわあっ！」

別の男の声がした。

こいつが運転手だ。

犯人は3人だ。

もはや、ハンドルをどう動かそうともどうすることも出来ない。
車は左右に振られ、衝撃と共に、どこかへ突っ込んだ。

赤石の身体も大きく振られあちこちに頭をぶつける。

すぐにドアが開く音がして、トランクの上から激しくノックする。

「おい！おい！」

リーダー格の男だ。

「大丈夫か？！」

とにかくここから開けてもらうことが絶対だ。

赤石は動かないことを決めた。

もしかしたら何かあったかと思い、開けるかもしれない。

誘拐ならば、身代金だ。

本人が無事でもないのに、金など簡単に要求できないだろう。
人質である自分の安否がまず気になるはずだ。

「おい！聞こえるか？おい！」

リーダー格の男はさっきよりも激しくトランクを叩いた。
音が響いて耳の奥にキーンとくる。

「くそっ！・・・おい！トランクを開ける」

「駄目だ！開けるな！」

だが、運転手をしていた男の声が響いた。

つづく。

第8回 姉のためにサトシは頑張る。

サトシは理解できなかった。

トランクを開けることは駄目だと言う。

今まで静かに運転していたイクオの叫びにサトシは驚いた。
意外だったのだ。

サトシは辺りを見回して納得した。

対向車線から、林に突っ込んでいくのをちょうど目撃した男性が心配して車を停めて、こちらに向かっていているからだ。
身体が固まる。

トランクを必死で叩いていたテツの動きも止まる。

そして素早く自分からその男の元へと足早に向かった。

近くに来させてはならない。

そう思ったからだろう。

イクオもテツの後を追って行った。

サトシはゆつくりとトランクの方へ足を進めた。

中のこいつは大丈夫なのだろうか。

気になり始めるとどうしようもなくなる。

サトシはトランクを開けたい衝動に駆られたが、思いとどまった。
口にガムテープをしていたとはいえ、開けてしまったために暴れられると困る。

向こうでは二人がうまく言いくるめているのだろうか。

テツの引きつった笑顔が目に見え。

自分の姉の恋人とはいえ、偉そうにされていると気分は良くない。

あの男とはウマが合わない。

それはお互い認識している。

ならば、なぜ、今回の犯行に二人が一緒にやっているのか。
それは、姉のためだ。

姉の重い病気を治すために金がいるのだ。

テツは恋人のため、サトシは姉のため、ここだけは二人の意志は、
はつきりと協力し合えるところだ。

テツはどう思っているかわからない。

多分、役立たずな自分を連れて後悔してることだろう。

確かに役立たずかもしれない。

だが、姉のためなら、自分の家族のためなら、なんだってしてやる。
サトシの揺らぎない気持ちはこれだけだ。

これだけで充分だとサトシは思った。

ようやく話がついたのか、大したことがないことに安心したのか、
相手がその場を離れようとした時。

どんっ！

どんっ！

どんっ！

大きな音がトランクから響いた。

不自然な音に相手も振り返る。

同時にテツの怒りの形相とイクオの蒼白な顔が目に見え込んだ。

しかし、こんな音を、止めることができなかったのは、サトシ本人
にも、そして、テツにもわかっていた。

つづく。

第9回 三波晴之は探偵になりたい。

やっと免許を取ったばかりで、父親の車を借り、慣れない運転で走っていた時の出来事だった。

対向車線から車が1台向かってきた。

その1台が急に林に突っ込んでいったのだ。

ハンドル操作のミスなのかわからないが、大変な事故を目撃したと三波晴之は思った。

正義感が強いというわけではなかったが、困った人をほっとけない性格だったため、すぐに車を停めて、突っ込んだ車の元へ急いだ。必要ならば、救急車もあるだろうと、携帯電話を確認したが、電波は1本しか立っていないかった。

それでもなんとか繋がるだろうと、いつでも連絡できるように、電話を片手に持っていた。

助手席から慌てて男が一人飛び出し、車の後ろの方、トランクの方へまわっていくのが見えた。

そして、トランクを何度か叩いている。

まず、その行動からして妙だ。

中の様子を探っているかのように、叩いている。

まるで、中に誰かがいるかのように・・・。

運転席にいた気弱そうな男がなにか言葉を発したように見えた。

視線は自分を捕らえている。

トランクを叩いていた男の動きが止まり、こちらに目をやる。

運転席の男とトランクを叩いていた男。

2人がこっちへ向かってくる。

三波晴之は若干の身の危険を感じたが、どうしても好奇心に勝てず、足を止めることはできなかった。

「どーも、ご心配かけてすみません」

完全な作り笑顔で気弱な男が話しかけてきた。

2人とも、30後半くらいに見える。

「なにかあったのですか？」

三波晴之は車の方に目をやりながら言った。

後部座席にいたもう一人の男がトランクへ向かっていくのが見えた。

「タイヤがね、パンクしたんですよ」

続けて気弱な男が言った。

「大丈夫ですか？助けを呼びましょうか」

三波晴之はわざと質問を投げかけた。

2人の顔から血の気が引いていくのが手に取るようにわかった。
トランクに何かある。

三波晴之の疑問がどんどん膨れ上がる。

「いえ、いいですよ。こちらでなんとかしますから」

予想通りに遠慮してきた。

「そうですか？僕手伝いましょうか？」

「大丈夫ですよ、見てください、大人が3人もいるんですよ、なんとかありますよ」

気弱な男は笑顔を見せた。

「そうですか、わかりました」

三波晴之は車に戻って警察に連絡をしようと思っていた。

ナンバーが確認できるまで近づけなかったのは仕方ないが、明らかに動きがおかしい。

トランクに何かが・・・いや・・・誰かがいる。

三波晴之はラジオを聴いていなかったのも、2時間前の事件を知らなかった。

単純に怪しいという自分の直感だけで判断したことである。

車へ戻ろうとした時、大きな音が3回、向こうの車から聞こえた。

それは、その音は、トランクから・・・？

三波晴之は振り向いて、2人の真っ青な表情に「マズイ」という言葉を読み取った。

つづく。

第10回 目撃者は関わりあいたくない。

僕は見てたんだ。

林の奥の方で。

いつもいじめられている僕には友達なんていない。

だから、毎日この林の中で自然という友達と遊んでいるんだ。

僕はずっと・一生それでもいいと思っている。

今日も林の中で遊んでいたんだ。

すると突然、車が1台、林の中に突入してきた。

僕の大事な友達の中に。

事故だ。

おじさんが一人飛び出てきて、トランクを叩いている。

すぐに動きが止まった。

見ると、向こうから歩いてくるおじさんがいた。

そうか、事故を見たんで心配して来たんだ。

おじさん2人はお兄さんの方へと向かっていた。

なるほど・トランクの中身がなんなのが見られたくないんだね。

その証拠に、ほら、もう一人のおじさんがまたトランクへまわった。

あ・でもお兄さんは戻ろうとしている。

どん！

どん！

どん！

絶対に間違いないけど、トランクの中から音がした。
誰かいるんだ。

お兄さんも、お兄さん達も驚いた顔している。

でも急に、トランクの傍にいたお兄さんが、叫びながら叩き出したんだ。

「俺の車があ！俺の車があ！」

つまり、あの時の大きな音は自分だと言いたいわけだ。
でもあの音は絶対にトランクの中からだよ。

向こうのお兄さんには騙せないんじゃないかな。

あ・ほら・複雑そうな顔してる。

不自然だもん。

結局お兄さんはお兄さん達の勢いに負けて、車に戻っちゃった。
そのままエンジンをかけて、走り去っていった。

携帯電話を耳に当てながら。

3人のおじさんはパンクを直して車を発進させた。

その場には静寂だけが残った。

誰もいなくなった。

残ったのは車が突っ込んできた時の跡だけだ。

でも僕見たんだ、工具を出すためにトランクを開けたとき、誰かがいたことを。

だけど、誰にも言わないよ。

僕は誰にも言わない。

僕はいつだって1人。

これからも1人。

大人の話に関わりあいたくないんだ。

だから、これは僕の心の中の出来事で、永遠に喋ることはないよ。
僕は普通に家に帰って、また普通に朝を迎えるだけだ。

後から知ったことだけど。

あのトランクにいた人はSGMのアカケイだったんだね。

そんなことは別にいいや。

さあて、また、遊びの続きを始めよう。

つづく。

第11回 倉橋刑事は電話が嫌い。

「妙な電話が入ってきたそうです」
部下の一人が伝えにきた。

赤石圭介誘拐事件の捜査本部。

指揮を執る、倉橋正一はやる気のない顔を部下に向けた。

どうせ、またデマな情報だ。

訳のわからない情報に振り回されるのは真っ平だ。

だが、聞かないわけにはいかない。

「なんだ？」

倉橋は仕方なしに聞いた。

しかし、その内容は冷やかしかかってくる、赤石圭介を目撃したとか、自分が実行犯だ、身代金を用意しろ、などのくだらないものではない。

15時頃に、怪しい車を見たとの報告だ。

トランクに誰かが入っているように見えたが、車の近くまで行けなかったので、ナンバーまではわからない。

男3人組で、どう見ても怪しかった。

15時頃だと、どこかに潜んでいるか、逃げ回っているか、そういう輩を見かけてもおかしくはない。
もしかしたら、もしかするかも・・・。

「情報提供者の名前は？」

「みなみはるゆき・三波晴之です」

「もう一度連絡を取って、場所の指定をして、待機してもらえ、俺も行く」

「わかりました。」

部下は急いで携帯に番号を打ち始めた。

「あの・・・」

後ろで女性の声がした。

困った顔の電話担当の女が倉橋に受話器を手渡そうとした。

「また・・・か？」

倉橋が聞くと、女は苦笑いして頷いた。

事件発生から、赤石圭介の所属事務所「オージ」の社長から何度も近況を聞かせるという電話が鳴ってウンザリしていた。

正直本当に何も情報がないのに、秘密主義だとか隠しているだとか好き勝手言われて良い気分ではない。

大方権力を駆使して連絡にこぎつけたのだろう、簡単に電話を鳴らしてくる。

こっちは暇じゃないんだ。

「倉橋です」

「あ・・・倉橋さんですか。どうもすみません、大谷です。」

秘書の大谷明の声だった。

間違いなく大路社長に掛けさせられているのだが、腰の低い態度のこの大谷には何も嫌な気分を感じることはなかった。

「どうも、大谷さん、心中お察しします」

「いえいえ、ご苦勞様です。・・・で・・・あれから・・・」

あれからもなにも、15分前には大路社長自ら怒りの電話があつたばかりじゃないか・・・と倉橋は言いたかったが、相手が太谷なので言つのは思い留まつた。

後ろで部下が「三波晴之とは連絡が付きません、恐らく運転中と想います。留守番電話にはいれておきました。近くのみどり喫茶で待機と伝えました」と報告してきた。

倉橋はこれ以上何度も何度も掛かってくるのは鬱陶しいので、この情報だけは教えておこうと決めた。

「太谷さん、先程、犯人と思われる車を目撃したとの情報がありましたので、今からその提供者に会ってきます」

「ほつ本当ですか！？・・・で赤石は・・・赤石は無事なんでしょうか！！」

太谷は大声で叫んだ。

きつと後ろのソファに偉そうに座っているタヌキ親父に聞こえるように言ってるのだろう。

「落ち着いてください、まだ、本当かどうかかわらないのです。この近くにみどりという喫茶店があるのですが、そこで待機してもらっています、まずはお話を聞くようにしますから、また連絡しますので、もう少し待っててください」

一気に言った。

早く電話を切りたい。

「・・・わ・・・わかりました・社長にも伝えておきます。よろしくお願ひします。」

「了解しました」

倉橋は電話を切り、溜息をついた。

そして、ミドリ喫茶に行くよう準備を始めた。

つづく。

第12回 大路公康は現場が好き

「なんだ？どうした？！」

大路公康は電話を切った秘書の大谷に詰め寄った。

さっきの電話で何やら新しい情報が出たに違いない。

大谷の態度は、そう確信させるだけの態度だった。

誰が見てもあの大げさにも見える反応を何も無いとは思わない。

大谷は一息ついて、大路の方を向いた。

「目撃者が現われたそうなので、今から詳しい話をミドリ喫茶という所で待ち合わせをして聞くそうです。」

出来るだけ簡潔に答えた。

「赤石は・・・？」

大路の気遣いは人間ではなく、商品に対しての気持ちだった。

「いえ・詳しい話は」

大谷は俯いた。

大路はしばらく考え込んで、「行くぞ、その喫茶店へ」と立ち上がった。

「えっ」

大谷の呆けた顔が目に入る。

「行くのですか？」

「そうだ、警察では当てにならん。ワシが直接聞いてやる」

「い・いや・しかし・それは・・・」

慌てて止めにはいる大谷を振りきって、大路は社長室の扉を開けた。待機していたSGMのメンバー、七星亮太、沖山誠二、三井健二が驚いたように大路を見た。穴吹秋の姿はその場になかった。

「どっ、どうしたんですか？社長」

沖山の問いかけに説明している暇はない。

「どけ」

大路は無視して事務所から飛び出した。

「大谷い！何してる早く車を出せ！」

「はっ・・・はい！」

大路の怒鳴り声に大谷がビクリと反応し、後に続いて飛び出した。

こいつはなんでこんなにトロい奴なんだ。

大路は舌打ちした。

SGM、いや赤石のおかげで手に入れることができた、ベンツに乗り込み、大谷を運転手として、車は発進した。

ミドリ喫茶といえば、捜査本部になっている場所のすぐ近くだ。

ここからでもそんなに遠くない。

警察よりも早くその目撃者とやらに会うことはできないだろうか。

何か情報が欲しい。

車を目撃したのであれば、せめて乗っている人間くらいは見ただろう。

その人相から、何か思い出せないだろうかと大路は思った。

後ろからは事務所を張っていたマスコミが数台追いかけてくる。

だがマスコミが少ない。

きつと穴吹秋が出て行ったから、そっちの方へと追いかけたのだろう。

数分後、ミドリ喫茶が見えた。

見える限りは警察が来ている様子ではない。

一刻も早く辿り着きたかったが、マスコミがいる。
更には渋滞だ。

大路は車から降りた。

「しゃっ社長!？」

大谷が慌てた。

こいつはいつも慌ててる。

「マスコミに來られては困る。ワシはこのままミドリ喫茶に行くから、お前は適当に走らせておけ。後で連絡する」

大路は狭い道へと入っていった。

さすがに予想外の行動のため、マスコミの連中も付いてくることができない。

「くくっ」

大路は口元を歪め、ミドリ喫茶へと向かった。

つづく。

第13回 七星亮太は昔を思い出す

「なんだったんだ・・・？今の？」

三井健二は飛び出した大路社長のことで思い出すように言った。

「さあな・あの人は昔からよくわからないからな」

七星亮太は頭を振りながら答えた。

「何にせよ、社長がマスコミ連中を連れて行ってくれたよ」

ほっとする表情で沖山誠二が言った、そして、少しだけ考えて、
「あと、秋もな」思い出したように言った。

穴吹秋が出て行った時にも数人のマスコミが追いかけていった。

その後で大路社長の突然の外出。

マスコミからみれば何か進展があったと思うのは無理もない。

「さあて。」

健二が背伸びをした。

「どうしよつか？」

つくづく退屈で面倒臭いような言い方だ。

「まあ・・・待機だろ」

誠二も止まっていた携帯ゲームをしながら返事をした。

「・・・圭介・・・大丈夫かな・・・」

亮太がポツリと言った。

その言葉で空気が変わった。

誠二と健二は何も言わず、聞こえないフリをしているかのようだった。

た。

亮太は失言に気づいたと同時に、いくら同級生とはいえ、圭介の言動が、行動が、世間も含めて自分達にも影響を及ぼしていることに気づいた。

初めは簡単なノリだった。

圭介が「スカウトされたんだけど、遊びでやってみようぜ」と誘ってきた。

今や誰でも芸能人になれるように思われている時代。

「遊び」というキーワードに「思い出作り」が加わり、「金」がプラスされた。

ちよつとだけ・・・と5人で事務所オージへ向かった。

5人の軽い思いとは逆に大路社長は切羽詰っていた。

この5人、SGMでなんとしても大穴を当てないと倒産寸前だという話も聞いた。

通常やっていくボイスレッスン、ダンスレッスンが地獄のように厳しかった。

5人全員負けず嫌いなのが功を奏して、脱落者はいなかった。

毎日のようにレッスンで馬鹿だ阿呆だと罵られて、辞めていくのは負け犬のようで嫌だった。

結果的に大成功をしたのだが、圭介の潜在能力に皆が驚かされた。

当初は5人の大したことのない、ごく普通のグループだった。

歌にしろ、踊りにしろ、圭介の才能が開花していくのを残された4人は感じ取り、脅威になった。

その辺りから、今まで5人の平行な線は、圭介が大きくリードしていくような変則な線に変わった。

圭介の態度も高飛車になっていき、亮太達を見下すようになり、その態度に我慢ならないのが、健二であったり、秋であったりであっ

た。

亮太や誠二も気にならないわけではない。

だが、確かに圭介の能力はずば抜けているのだ。

あのオールマイティーな才能を疎ましく思うこともあれば、羨ましく思うこともある。

あとは圭介本人の人間性。

いくら、才能があっても、ああいう態度だと誰も付いてこなくなるのはわかりきっている。

本人が気づいていないのだろう。

「圭介・大丈夫」という気遣いの言葉は、心のどこかにある、「大丈夫ではない」方を期待している自分達の気持ちかわかりすぎているために、そんなことを少しでも思っていることが恥ずかしいのだ。誠二と健二が黙ったのはそのせいだ・そのせいであって欲しい。

「おおっ、おかえり〜人気者!」

健二がゆっくり帰ってきた秋をからかった。

「・・・」

秋は溜息をついて、また本を読み始めた。

亮太は秋の行動に違和感を覚えていた。

そう、さっきまで秋はマスコミを連れて、どこへ行っていたのだ。

つづく。

第14回 倉橋刑事は最高の部下を持つ

倉橋が外出する直前に、上から連絡が入った。状況を聞かせるということだ。

倉橋は目撃者に会うためにミドリ喫茶に行くことは報告しなかった。まず話を聞いてから報告する気でいたのだ。

だが、誘拐されたのは日本でも知らない人間はいないくらい有名な・・・クソガキだ。

捜査の手順が悪く、もし何かあればマスコミの集中砲火をくうのは警察だということは目に見えていた。

慎重にならざるを得ない。

その報告のため、外出に遅れた。

倉橋は上の者に悪態をつきながら早歩きで目的地へ向かった。

未だに情報提供者の三波晴之とは連絡が取れていない。

留守電になるそうなのだ。

だが、ちゃんと吹き込んでいるし、いちいち折り返しをしない奴かもしれない。

何はどうあれ、ミドリ喫茶には行かなければ進まない。

ミドリ喫茶はよく待ち合わせや打ち合わせに使われる店で、テーブルとの間に大きくはないが、観葉植物が何本か置かれている。

それによって、お互いのテーブルを覗くことができないようになっている。

内密の話が誰かに筒抜けになったり、仮に聞こえたとしてもすぐには顔を確認できない。

そういった誰にも干渉されない間取りが営業マンに好まれて使われているようだ。

今回ここを選んだもの、その理由と捜査本部に呼ぶと緊張して話ができないかと判断したからだ。

倉橋は部下の好判断を嬉しく思った。

ミドリ喫茶に到着しようかとした時、店内で女性の悲鳴が聞こえた。倉橋は部下達を見た。

全員の脳裏にある一つの考えが浮かんでいた。

誘拐、車、目撃者、情報、提供、悲鳴、喫茶店、店内、間取り。

そして、口封じ。

倉橋達は店内に飛び込んだ。

唯一の目撃者、三波晴之は胸から血を流し、椅子にもたれるようにぐったりしていた。

倉橋は三波晴之の顔を見て、長年の勘で思った。

この目撃者はもう死んでいる。

事実、胸の傷が致命傷となっていた。

なにか鋭利のようなナイフみたいな物で一突きだった。

凶器は持ち帰ったのだらう、傍には何もなかった。

三波晴之が座っていた場所は店の中でも一番奥、しかも、色んな人間が使用するであろうトイレからも逆方向に離れている場所だった。何かをやるうとしている者・犯人にとって、これほど絶好な場所は無かった。

「辺りを確認しろ、皆その場から出るな、動くな！」

倉橋は大声で叫んで指示をした。

さすが、洗練された部下達である。
次にどうするか・・がよくわかつている。
倉橋の指示とほぼ同時に動いていた。

外に出て確認する者、素早く店内の隠れる場所を確認する者、客の
人数、性別、特徴を確認する者、瞬時に自分の役目を理解している。

その店内で、動くなと言ったのにも関わらず、必ず動く奴がいる。

「おい、そこ、動くなと・・・」

明らかにその場から逃げようとしている、太った強欲そうなその男
は。

三波晴之の席のすぐ隣の場所です。

脂ぎったその顔は緊張と自分の置かれている立場の悪さに絶望で覆
い尽くされた表情だった。

「お・大路社長」

倉橋は大路がここにいることよりも。

自分が迂闊にもミドリ喫茶のことを喋ったがために、ややこしい人
物を巻き込んだの殺人事件。

倉橋は上への報告のことだけを考えていた。

つづく。

第15回 アカケイはお外に出たくてたまらない

どうやら完全に眠っていたようだ。

赤石圭介はゆっくりと目を開けた。

だが、暗闇。

トランクの中にいるのだから当たり前だ。

赤石は車の音や振動を感じないことに気づいた。

停車しているのだ。

さっきのような事故ではない、目的地に着いて停車しているのだ。

その証拠に車内に人の気配は全くない。

どんなに声を潜めていても、気配というのは簡単に消えることはない。

赤石はそれを今回の件で身をもって理解した。

何も感じない。

間違いなく、今、赤石をトランクの中に置き去りにして、どこかへ行っている状態である。

さっきは思いっきり音を立てた。

誰か気づいてくれたのだろうか。

結局、トランクを開けて、睨まれただけだった。

無言であつたが、「静かにしろ」と目が語っていた。

一瞬顔を見たが・・・恐らくリーダー格のやつだろうが、見覚えのない奴だった。

赤石は少し冷静に考え始める。

ここで音を出すのは良くない。

誰がいるともわからないし、犯人に聞こえる可能性が一番高い。

あの時は混乱して、音を立てることしか思いつかなかったが、何か良い方法が頭に浮かぶはずだ。

武器になる物・・・連絡手段は・・・？
携帯だ。

赤石はポケットの中を探ろうと身体を伸ばしたりしたが、感触がない。

そういえば、携帯はマネージャーに持たせていたはずだ。
連絡手段は断たれた。

武器になる物など、この暗闇の中で、しかも縛られている状態で探せるわけがない。

何かないものかと動ける範囲で探してみるが、何もない。

気落ちしていた時に、足音が聞こえた。

段々と大きくなり、近づいてくる。

そして、トランクは、開かれた。

外の光が目に入り、赤石は思わず、顔を背ける。

目の前にいる男2人は何も言わずに赤石を抱え上げて運び上げた。

どこだか場所はわからない、周り森に囲まれた山奥であることは簡単にわかった。

山小屋がある。

ここが奴らのアジトか。

現在わかっているのは3人。

この小屋の中に他に後何人いるのかわからない。

それに、なぜ、自分なのだ。

恨まれることでもしたのか。

身に覚えがない。

なぜ。

わからないことばかりで迂闊な行動はできない。

命の心配はないとは言いが、人質であるのなら、今は、殺されることはないだろう。

今のうちは・・・。

赤石は抵抗せずに身体のを抜いた。

つづく。

第16回 テツは恋人を救いたい

小屋の中、赤石圭介を担いできたサトシとイクオは慎重に入ってきた。

赤石を降ろすと、サトシはすぐに外へ出て行った。

イクオはテツの近くに座った。

あとは依頼人に連絡をするだけだ。

依頼人が誰かもわからない。

あれは・・・数ヶ月前。

突然携帯が鳴り、依頼人である男からだった。

奴は名乗らなかったが、こちらのことはお見通しだった。

奴は自分の恋人が、手術なしでは助からないことを知っていた。

この歳で、まともな職もつけず、バイト、バイトで食いつないでいたテツには多額の手術代を払えるだけの財力はない。

サトシにしてもそうだ、早くに両親を亡くし、姉弟で励ましあいなから生きてきた。

生きていくのが精一杯で金はない。

サトシも定職には就いていなかった。

依頼人は言った。

「仕事をこなせば・・・金をやる。」

その金額はまさにテツが欲しかった・・・サトシが欲しかった額だった。

自分のことなどどうでもいい。

ただ、彼女の命を救うことが出来れば。
駄目かもしれない・・・しかし、最善の努力はしていきたい。
愛する女のために。

テツは内容を聞く前にOKの返事をしていた。

恐らく健全な仕事ではないということとはわかりきっていた。

一日でそれだけの金額を貰うに値する仕事・・・健全なわけがない。

「ある有名人を誘拐しろ。」

それが仕事の内容だった。

その有名人が・・・SGMの赤石圭介、アカケイだった。

赤石圭介を誘拐して、誰にも見られない場所へ行き、依頼人に電話する。

これが仕事だった。

まずは信頼でき、協力してくれる仲間を探すことから始めた。

サトシを呼ぶのはテツの選択肢にはなかったのだが、サトシは頑として譲らない。

こいつもまた姉を愛しているのだ。

イクオはテツの幼馴染で、一番心の許せる相手だった。

誘うことは決めてあった。

同じ独身ではあるが、イクオは借金まみれで、いつこの街から逃げ出すのかと思っていた。

そんなタイミングでの、この仕事だ。

イクオはすぐに飛びついた。

物静かで、弱々しく、一人では絶対にやることはないだろう。

今回もテツと一緒にだからこそ、動いてくれる。

メンバーが決まると依頼人に連絡した。

こいつは自分の名前すらも名乗らない。

依頼人はテツ達の携帯番号や、メールアドレスを聞いてきた。嘘を教えてもよかったが、信用に関わるので、正直に伝えた。後は誘拐の段取りだ。

依頼人は「段取りは別の人間に言っている」とだけ言い、電話を切った。

そこで現われたのが、テツ達の監視役としてなのだろう、ヒロという男だった。

テツは赤石を見る。

もぞもぞと苦しそうに動きながら、辺りを見回している。

こんなどこにでもいそうなガキが日本で一番有名な奴……。目隠しをしていなかった失態に気づいたテツは赤石に向かって目隠しをしようと立ち上がった。

突然扉が開いて、大きな、ガツシリとした体格の男が入ってきた。無口なこの男こそが監視役のヒロである。

つづく。

第17回 イクオはあの人を疑う

イクオはヒロの姿をぼんやり見ていた。

スポーツか格闘技でもしていたのか、服を着ていても、はちきれないばかりの筋肉。

そのヒロが依頼人から預かってきた、報酬の3分の1を皆に渡してくれた。

それから、全ての段取りはヒロがしてくれた。

赤石圭介の乗ったロケバスが今日あの場所を通過するという情報。車の手配。

今逃げ込んでいる山小屋の手配。

ヒロ自身はフォローとして別行動で動いていた。

一緒に動いてないことに不信感を持つが、いつ逃げ出すともわからない自分達を監視するのは依頼人としては当然のことで、仕事完了時には、恐らくこのヒロが全報酬を渡してくれるのだろう。イクオが依頼人の顔を見ることは絶対にならないのだと思った。

サトシは外で煙草でも吸っているのか、姿が見えない。

逃げ出すような馬鹿じゃないはずだ。

自分の姉の命がかかっているのだ。

テツが報告をしているのか、色々ヒロに話している。

さっきの事故のことや、目撃されたことも話しているのだろうか。

ヒロは頷き、時折何かを喋っている。

話が一旦途切れて、テツが電話を取り出した。依頼人にかけるのだ。

ヒロがかければ良いと思うのだが、あくまでも裏方なのだろう。
依頼人からしたら自分達との取引なのだ。

「俺だ、赤石圭介を計画通り誘拐した」

テツは堂々と言った。

オドオドしていると逆に弱味を握られているようで精神衛生上良くないような気がする。

「次はどうしたらいい？・・・ああ・・・わかった」

電話を切ってテツは、イクオとヒロの方を見ながら、「しばらく待機だ」とだけ伝え、部屋から出て行った。

イクオは赤石を見た。

完全に起きているが、目隠しをしていないことに気づく。

赤石は視線をキョロキョロとしながら辺りを覚えているようだ。

そういえば、さっきテツが立ち上がったのも目隠しをするためだった。

そこへヒロが帰ってきたので忘れてしまったのだ。

イクオは立ち上がって目隠しをしようとした。

その時サトシが飛び込んできた。

「おっおい！テツテレビっ！テレビをつける！」

TVはこの部屋にしかないのだが、あの慌てよう、きっと車のラジオでも聞いていたのだろう。

その大きな声にテツも戻ってきた。

イクオはあまりにも酷い慌てぶりにただ事ではないと感じ、TVをつけた。

当初は、こういう事件を犯したあとのだから、ニュースをみてしまいがちなのだが、余計な嘘の報道に混乱されてはと思って、TVは極力見ないように決めていた。

ありもしない情報に振り回されているだけだ。

「本日誘拐された、人気グループSGMのメンバー赤石圭介さんの件で新展開がみられました。まず誘拐犯を目撃したとされる、三波晴之さん19歳が捜査本部近くの喫茶店で殺害されるという事件がありました……」

「これってよ……さっきのあいつじゃねえのか？」
サトシが狂ったように喚く。

そんな馬鹿な。

横目でテツを見た。

テツも訳がわからないといった顔だった。

TV画面にその「三波晴之」の顔写真が映し出された。

「……！」

その場にいる全員の息が止まった。

まさに・その男は・あの時近寄ってきた・若い男に間違いなかったからだ。

「ちょっと待てよ！殺しはねえって話だろうが！なんでこんなことなんだよ！わけわかんねえよ！俺達はやってねえぞ！」

イクオは考える。

偶然にはおかしい。

今回の事件が関わっていることは間違いない。

だが……この目撃者のことを知っているのは誰だ？

自分達が見られたということを知っているのは誰だ？

サトシ？テツ？いや、そんなはずはない。

目的は金だ。

それも絶対に必要な。

裏切るような行動に出るわけがない。

少しでも推理すれば馬鹿でもわかる。

これは完全に口封じだ。

しかもこの三波という奴と接触したことを知っている・・・。

どこかで見ていた・・・？

「・・・・・・・・っ・・・」

テツも同じ思いを感じたのであろう、イクオが振り返るのと同時代
つた。

その振り返った視線の先には・・・。

そう・・・「別行動」した・・・ヒロがいた。

つづく。

第18回 アカケイは混乱してたまらない

赤石圭介はニュースをじっと見つめていた。

目撃者が殺された。

しかもその犯人はこの中にいる・・・？

状況を見る限り、後から入ってきたこの体格の良い男に疑いがかかっている。

それもそうだ。

トランクの中にいたとはいえ、リーダー格の男、運転手の男、目の前で騒いでいるサトシという奴、この3人と一緒だったのだ。

殺しにいく時間などない。

殺しているような音・・・つまり悲鳴なども聞こえなかった。

・・・となると、消去法で残ったのは、この後からきた奴ということになる。

他に仲間がいればの別の展開になるが、どうもそのような雰囲気ではない。

「俺はな！金を受け取って！姉ちゃんを治してやりたいだけなんだよ！こんな殺しとか、そんな馬鹿な！」

サトシが大騒ぎしている。

勝手なことを言ってやがる。

殺人と誘拐は別物か？

殺したことで、殺していないことでの判断か。

同じ犯罪じゃないか。

勝手な順位をつけるんじゃないか。

赤石はもし自由であれば、真っ先にサトシへ殴りかかっただろう。

「お前か？」

リーダーの男が口を開いた。

「お前が殺ったのか？」

その声に怒りが混じっている。

話が違うという顔だ。

運転手の奴も同様に心配な顔色を浮かべている。

サトシは「え？」という表情で、一瞬考えたのか、はっと気づいたような表情に様変わりした。

だが疑われている奴は黙ったまま立っている。

「おい！なんとか言えよっ！てめえが殺ったんだろうが！」

サトシが横から怒鳴りながら、殴りかかろうとしているのを、2人が止めた。

「やめるんだ、サトシ」

「離せ！馬鹿野郎！離せええ！絶対この野郎だ！この野郎が殺ったんだよ！監視するだけだから、何があるうが、関係ねえからだよ！全責任は俺達だからなあ！」

「他にも噂ですが・・・」

突然のアナウンサーの声に全員の動きが止まり、視線がTV向けられる。

「赤石さん自身のヤラセじゃないかという話も出てきています」

なっ・・・。

赤石は絶句した。

そんな馬鹿な噂がどこから出てくるというのだ。

‘ ‘ そういうにはですね、理由がありまして。まず最もおかしいのは・・・。 ‘ ‘

被害者なのにその扱い、マスコミほど信用のおけない奴らはいない。赤石は暴れたくてたまらなかったが、身動きがとれずに諦めた。そして、トイレにいきたくなったらどうすればいいのだろうと、ふと、思った。

つづく。

第19回 SGMに亀裂できる

「秋！お前だろう！」

七星亮太は穴吹秋の胸倉を掴んだ。

「おい！やめろよ」

それを沖山誠二が間に入った。

事務所オージ。

事態は予測不可能な方向へと向かっている。

大路社長が出て行って、残ったのは、SGMのメンバーのみ。
出て行ったきり帰ってこない。

どこかの喫茶店で殺人事件があったらしく、被害者は今回の誘拐事件の犯人を見たと言われるらしい。

もしかしたら、その事件に巻き込まれたのだろうか。

そして、今度はマスコミが報じた赤石圭介の自作自演の疑い。

その誤解を招く情報をご丁寧に提供したのが、秋だと、亮太は思っているのだ。

「なんでよ、なんで秋がそんなこと言うんだよ！そんなわけないだろう」

三井健二は泣きそうな顔で訴えている。

「・・・っ！」

秋は亮太の腕を振り解いた。

はあ、はあ、はあ・・・と2人とも肩で息をしている。

「あの時、お前一人で外に出ただろう」

亮太はいきなり切り出した。

つい少し前に秋が捨て台詞を吐いて出て行ったことを指摘している。
「お前が出て行ったことでマスコミもお前の後をついていったはずだ。その時に何か余計なことを言ったんだろう！圭介がやらせでやった誘拐事件だと！」

そういえばと誠二も健二も秋の顔を見る。

秋は観念したように溜息をついた。

「考えたらわかるだろう、あいつの自作自演は」
投げやりに話し始めた。
やはり、秋だったのだ。

実際は秋がコメントする前に出ていた話だろうが、同じメンバーからの意見にマスコミはお墨付きを貰ったように勘違いした。
秋のコメントが決定打になったのは確かである。

「なんでそんなことを。圭介にはメリットなんてなにもないじゃないか」

「あるさ、自分の人気上昇のためだ」

亮太の意見に秋は簡単に反論した。

「誘拐されて、死にそうな目にあって、自力で脱出、もしくは、自分で犯人を捕まえる、そんなシナリオならば、あいつは英雄だな」

「そんな回り道のような・・・やり方・・・」

「あいつの今の地位は普通にやっても変わらないんだよ、既にあい

つの人気や知名度は出来上がってるからな、もつと皆がびつくりするようなことをしないと、更に上を目指すことは出来ない。」

誰も何も言わない。

赤石圭介ならやりかねないと思っっているからだ。

「そもそも、ロケバスが襲われたっていうのが怪しいだろう、犯人があの日、あの時間にあの場所を通過するということを知ってることが普通では有り得ない。手際が良すぎる。怪我人も出なかったらしいじゃないか。」

「そつ・それは・・・予定なんて調べたら・・・」

「いや無理だな。じゃあ、お前が俺の来週の予定を詳しく言ってみろよ。それが、わからないのなら、どうやって調べるんだ。」

「・・・・・・・・」

秋の言うことはもつともな意見で、確かに考えたらおかしい。

「・・・・そうだよ。おかしいよ。だって、本気で誘拐したかったら抵抗されても、そいつを殴ってでも誘拐するよ。怪我人がいないくらい簡単に・・・・」

健二が口を挟んだ。

「もしくは・・・抵抗しなかった・・・とか・・・な。」

誠二も話に入ってきた。

「お前ら・・・・」

亮太は3人を見た。

3人が赤石圭介を疑っている。
そんなことはない。

亮太はそう思ったかったが、その心の奥底には3人と同じ気持ち
が渦巻いていた。

つづく。

第20回 事務所オージにて

秋が口を開いた。

「外に出た時についてきたマスコミに言われた。もしかしたら自作自演じゃないですか？つてな。俺は、その可能性もある、と答えたよ」

秋のその言葉を確信として、マスコミは取り上げたのだ。

明日には圭介の自作自演報道が過熱するに違いない。

「言ったことに後悔はない。なぜなら、その可能性は、俺も思っていたことだったしな」

淡々とした口調で冷静に話す。

「だからと言って・・・そんな受け答えなんて・・・」

亮太は困った顔をした。

突然事務所の扉が開く。

4人が全員振り返る。

秘書の大谷明だった。

一目で何かあったのだと確信できる顔色であり、表情であった。

「……………大路社長が……………事情聴取を受けることになった」

大谷は言い難そうに、か細い声で言った。

「……………はああ？」

4人の声だった。

「なっなんでそんなことに」

「目撃者が殺されたニュースを知っているだろう。あの現場は、大

路社長が向かっていた喫茶店なんだ」

「・・・・・・・・・・！」

「大路社長・・・現場にいたんだ・・・多分・・・」

「多分・・・って大谷さんはいなかったんですか？」
誠二が問いかけた。

「うん、僕はいなかった、マスコミを撒くために、社長自ら途中で車を降りて勝手に行ってしまったからね、僕は携帯待ちの待機だったんだけど、あまりにも遅いので行ってみたら・・・こういうことさ。」

大谷は溜息をついた。

それは、社長への情けなさからか、それとも、これからの展開に対してかは、SGMの4人にはわからなかった。

「じゃあ社長しばらくは・・・」

「・・・というよりも、ひょっとしたら、誘拐事件が解決まで・・・ずっと・・・」

沈黙が流れる。

電話の呼び出す音が鳴り響いた。

あまりにも突然すぎて全員の身体が強張る。

音の主は、大谷の携帯だった。

慌てて携帯を取り出した大谷は着信の相手も確認せずに、電話に出た。

「はい。」

相手は警察か、それとも、大路社長なのか。

大谷は電話を耳に当てたまま、事務所を飛び出していった。

大谷が出た後に、今度は事務所の電話が鳴った。

亮太が電話を見る。

他の3人も電話に出ろというアイコンタクトを向けた。
仕方なく亮太は電話に出た。

「社長いるか」

いきなりの機械音声。

亮太は犯人だと直感した。

「いえ・・・今は・・・いません」

「そうか・呑気だな・こんな時に。」

「あつあの！失礼ですが！・・・どちら様ですか？」

少しの間があつて・・・機会音声は・答えた。

「・・・・・・・・とつくにご存知なんだろう？」

亮太はゴクリと唾を飲み込んだ。

「・・・・・・・・圭介は無事か。」

プツリと電話は切れた。

つづく。

第21回 倉橋刑事は馴れ馴れしい

捜査本部。

倉橋刑事は上への報告に頭を悩ませている。

重要な情報提供者と会うことを言わなかったことだけでも大問題なのに、更にその提供者が殺されるという大失態。

そして・・・。

「だから！ワシは関係ないと言っとるだろうが！」

拳句の果てには、こんな厄介な男を呼び出す羽目に。

本部に連れてこられた、大路社長は終始この調子で怒鳴っていた。この高慢で自分勝手な男が現場にいる原因を作ったのも倉橋自身だった。

あまりにもしつこい電話に苛ついた倉橋は丁度良く出てきた提供者のことを話してしまったのだ。

これで少しは大人しくなるだろうと考えていたのだが、まさか、社長から現場に出向くとは思ってもなかった。

まさに「想定外」である。

タイミングが悪すぎる。

誘拐事件、そして目撃者の死、その現場に事務所社長。

疑われて当然だという声も出てくる。

ただ、店の中にいた人物全員に話を聞かないといけない。犯人を目撃しているかもしれないからだ。

今のところ重要な情報はきていない。

店の中の犯行の目撃はない。

誰も殺された三波晴之のことさえも店の人間は覚えていないという。呆れた店だ。

大路社長は本当に関係ないかもしれない。だが、簡単に帰す訳にはいかない。

「では、事件直後のことを話してください」
倉橋は溜息をつきながら聞いた。

「何度も言ってるだろうが！ワシはアンタらの情報を聞いて一人で勝手に、その目撃者とやらに会おうとして……」

倉橋が横から口を挟んだ。

「そこはわかっています。私が聞きたいのはですね、大路社長。貴方が店に入ってからのことを聞きたいですよ」

「だから・店に入ったら、店の女の悲鳴が聞こえて、振り向いたらもうそいつは血を流して……」

「もっと詳しくお願いできますか。」

「……」

「いいですか、大路社長、私はね、貴方が何か重要なものを見て、隠しているのしか見えないんですよ。」

これはわざとカマをかけたのだ。

これまでも経緯での感情もあつたかもしれない。

生意気なこの男を困らせてやろうと、殺人事件を担当している刑事らしかぬ発想に少し後悔を感じた。

「……」

急に大路社長は黙った。

あれだけ今まで怒鳴り散らしていた男が、何も喋らなくなった。こつという一直線な男は嘘が下手だ。まさか、ビンゴだったのか。

「大路社長？」

「黙秘する」

「・・・は？」

「何度も言わせるな、ワシはもう喋らん」

この男は本当に嘘が下手だ。

そういう言い方をすれば、何か隠していることを認めているようなものではないか。

「そうですか・・・では・別室へ行ってもらいましょう」

「なんだと！」

「知ってることを話してもらいましょうか」

倉橋は馴れ馴れしく大路の肩に手を置いた。

その行動に自分自身が満足していくのを感じ、また満足している自分を恥ずかしくも思った。

つづく。

第22回 サトシに聞こえる甘い声

テツは何も喋らないヒロに嫌気がさしたのか、自分の携帯を出して突きつけた。

「お前のご主人様とやらにかけろ」

だが、ヒロはその電話を取ることもなく、ただ黙っている。この男は一体何を考えているのか。サトシはヒロの落ち着いた顔を見る。

20代後半。

自分と同じくらい、もしくは、少し上・・・若い。尚更怒りが込み上がる。

ふざけんな・・・そのバカにした態度はなんだ。

「おい！かけろって言ってんだろ！どういいうことが、はつきりさせやがれ！」

サトシは叫んだ。

ヒロに掴みかかるうとしたが、テツがそれを制した。

「やめろ、サトシ。俺がかける。」

そういうとテツは電話番号を呼び出して、ダイヤルした。

電話を耳に当てる。

その間ずっとヒロを睨んだままだった。

テツの表情が変わる。

依頼人が、電話に出たみたいだ。

「俺だ。」

怒りを抑えたままの声で話し出したが、すぐに曇った顔になった。

「おい？！もしもし？おい！・・・くそっ、切れやがった。」

電波が悪いのか、途中で切れたようだ。

テツは折り返しの操作をして再度通話を試みた。

「・・・・・・くそっ！話し中だ！」

何度かりダイヤルをしたが、話し中に変わりはない。

もしかしたら、よくある行き違いかもしれない。

「ちっ」

舌打ちをしてテツはその場へ座り込んだ。

しばらくして再度電話するつもりなのだろう。

サトシはこの怒りをどこへ向けていいかわからなくなり、不自然にあたりを見回した。

赤石と目が合った。

赤石の自分を見る目は、憎悪の塊のようだった。
なんだこいつ・・なに睨んでやがる。

ムシャクシャしている、サトシは赤石の元へ駆け寄り、胸ぐらを掴んで無理矢理立たせようとした。

一言、赤石が呟いた。

誰にも聞こえない、サトシだけに聞こえる声で。

「アンタの欲しい金・・俺が出そうか？」

・・・・っ・・・・。

なに？

なにを言っただやがる。

「なんか揉めてんだろ？」

黙れっ！黙れっ！

「あんな奴らなんか・裏切ってさ・俺を逃がしてくれよ」

できるわけない。

そんなこと。

「稼いでるんだ、わかるだろ？金はあるんだ。」

サトシが無意識に素早く辺りを見た。

テツは考え事をしているのか、気にしていない・いや、気にしている場合ではないのだろう。

イクオもやつとこっちに気づいて何か言いたげな様子だ。

きつと、乱暴はするなと言いたいのだ。

ヒロ・・ヒロだけがじつと見ていた。

気づかれた？

いや・まだ何も行動を起こしていない。

赤石の話に返事もしていないのだ。

疑われる理由はない。

ただ、単に、気に入らないから、赤石に掴みかかっている。

そんな場面にしか見えない。

まさか、この状況で赤石が交渉を持ちかけているなんて、誰が思うだろうか。

「姉ちゃん助けたいんだろ？」

悪魔の囁きだった。

馬鹿にされてもいい、殴られてもいい、罵られてもいい、愛する女性に巡り合えなくてもいい。

今、自分の生きがいである、あの一言。

「姉」

サトシは、赤石を手から離し、座らせた。
そして、赤石を監視するような素振りで、自分もその隣に座り込んだ。

つづく。

第23回 再び事務所オージにて

電話が終わって、事務所に戻ってきた大谷明は、中の雰囲気圧倒されたのか、眉間にしわを寄せた。

「どうしたんだ？みんな」

大谷が心配そうに言った。

「犯人から・・・電話があつた」

「なんだって！そつそれで？なんて?!」

「社長いるか・・・って。いないと言って、圭介のこと聞いたら・・・切れた。」

「・・・」

「大谷さん、どうしたらいいかな」

すぐるような目で七星亮太は言った。

少し考えて大谷は指示を出した。

「・・・警察に電話してください。あつ、僕がしましょう。」

「え？でも」

きつとよくあるTVドラマでも思い出しているのか、三井健二が当惑しながら答えた。

「犯人は大路社長が事情聴取されていることは知らない。犯人は大路社長と交渉を望んでいる・・・ということは、ここに社長がいないと困ります。警察もその辺のことはわかるでしょう。結局は警察

もここに来るのですから、万が一でも社長が逃げ出すことは出来ません。問題はないと思います」

そういうと大谷は受話器を取り上げ、電話をかけ始めた。

「なあ、どんな声だった？」

沖山誠二が興味ありげに聞いてきた。

「男だとは思うけど・・機械のような声だった。ほら、よくTVで音声変えてありますってあるだろ？あんな声だったよ」

「じゃあ・・圭介かもしれないな」

穴吹秋が冷静に分析した。

「お前、まだ・・」

呆れた口調で亮太が秋を睨む。

「・・・・可能性だ」

同じ話を再開させたくないらしく、秋は早々に話を切って、本を片手に事務所の隅へ向かった。

「・・・・・よろしくお願いします」

丁度、大谷が電話を切った。

「すぐに段取りして来てくれるそうだよ」

安堵の表情で大谷は4人に言った。

「とにかく次の電話が鳴るまで、警察には早く来て欲しいね」

「警察からしたら、ここで脅迫電話を待ちながら、大路社長の事情聴取もでき、更には事務所も調べることができる。最高に出血大サービスだな」

誠二が皮肉たっぷりに言った。

事務所の空気が少しだが和んだ。

つづく。

第24回 大路公康は隠し事が好き

本部が慌しく動き始めた。

大路公康は本部自体が何処かへ移動しようとしているらしく、捜査員の声を別室で聞いていた。

さつき責任者の倉橋とかいう奴に電話がきたと報告があつて、部屋を出て行つてから急にだ。

なにか特別な情報でも入つたのだろうか。

それでいい、そうなることによつて、自分の取調べが長引くことを祈る。

まさか・こんなことになるなんて・あいつがいるなんて・あいつがあんなことをするなんて。

大路は頭を抱えた。

自分は殺してはいない。

それは間違いない。

たまたまその場に居合わせただけなんだ。

だが・あのことは言えない・言えるわけない。

まさか、自分の息子が、殺人者だなんて。

正確には隠し子だ。

大路が若いときにできた子供だった。

遊び半分ということもあり、結婚する気は全くなかった。

中絶を考えて話し合ったが、当時の女は産むと譲らない。

大路は渋々承諾をしたが、そのまま煙のように、意図的に消えた。

つまりは、捨てたのだ。

養育費も一切払わず、なにもなかったものとして過ごし始めた。

恨まれて当然なのに、女が押しかけたり、連絡をしてくるということとは、その後、なぜかなかった。

その代わり、当て付けなのか、毎年息子の写真を1年に1枚送ってきている。

どこかの店のDMを見る感覚で毎年見ては捨てていた。

大路はそのまま別の女と結婚し、現在の家庭を築いた。

あんな状況で出くわすなんて。

あの現場、ミドリ喫茶に入って、周りを見渡すと、客自体は少なかったが、奥の方に男が二人いるのが目に映った。

その内の1人が、忘れるはずはない、自分の息子だということを、即座に大路は認識した。

DM感覚で見ていたとはいえ、自分の子供だ。

一目でわかった。

相手の男は連れなのだろうか。

周りの客層と目撃者のイメージを勝手にリンクさせると若い男となる。

そうなると息子と一緒に座っている連れの男がそのイメージに当てはまる。

突然、息子が立ち上がり、目の前にいる男にナイフ突き刺した。

大路は驚愕したが、その驚きも冷めやらぬまま、息子はその場を後にして素早く出て行った。

息子の立場から見れば、運が良いのか、大路以外に見た者はいなかった。

刺された男が目撃者だったのか。

結果的にはそうだったのだが、大路はショックを隠せられなかった。程無くして、女店員が叫び、倉橋刑事が乗り込んできた。

絶対に言えない。

大路のこの思いは、息子に対しての心配ではなかった。事務所社長に隠し子いる・それくらいはいい。

だが、その子供が殺人？！

しかも、赤石誘拐に関係あるかもしれない。

これほどスキャンダルでイメージダウンなことはない。

別室のドアが開いた。

「大路社長、一緒に来てもらいますよ」

倉橋が言った。

「なに？！」

「貴方の事務所に脅迫電話がかかってきたそうです。貴方を出せと言っています。貴方と事務所に戻り、犯人と交渉して貰わねばなりません。我々も行きます、安心して下さい。」

大谷の馬鹿野郎が！

大路は心の中で毒づいた。

今この状況で事務所に入られたら不味いことになる。

こいつらは、その件を理由に事務所を色々と調べるつもりなのだ。自分の疑いはまた解けていない。

「・・・ところで・・・大路社長」

おもむろに倉橋が言った。

「今のご家族とは別に息子さんがおられるみたいですね」

「・・・・っ」

全く警察という所は・・・。

大路自身が息子を見た以上、とやかく言えないが、普通何も知らな

い者だと、今回の事件と隠し子との接点があるなどと思うほうがおかしい。

「いや少し身辺調査をですね」

「それがどうした。昔のことだ。もう関係ない。ワシは会ったことさえないんだぞ」

事実本当のことだ。

これが、「顔は知っていたのか」と聞かれば、すぐさま表情に出たことだろう。

「いえ・少し妙なことが・・ですね。まあ偶然なので、こちらもまだ重要視はしてないのですが・・」

倉橋はチラリと大路を見た。

「大路社長の・その・息子さん・・行方不明らしいですね。」
大路の顔が蒼白になる。

「ええと・・そう・・成瀬・・博彦・さん。」

確か・女の苗字は成瀬と言ったはずだ。

「友人からはヒロと呼ばれてるようですね」

倉橋は最後に一言付け加えた。

つづく。

第25回 アカケイは複雑でたまらない

「なあ、おい」

赤石圭介は隣に座っているサトシに話しかけた。

口にテープをされていて、上手く喋れない。

そのテープのおかげで、さっきは囁くようにだが、サトシだけに話せた。

それはある意味良かったかもしれない。

サトシが口のテープを剥がした。

「トイレ行かせてくれよ」

誘拐されてから、飲まず食わずで縛られたままだった。

サトシは赤石を見て、リーダー格の男へ視線を移した。

「変なこと考えるなよ」

リーダーの男は忠告した。

サトシは赤石の足の縛りを解き、立たせて、トイレへ付いていくため、後ろに回った。

トイレは小屋から出た所にある仮説トイレのようなものだ。少し距離がある。

このトイレ時間が赤石に与えられた唯一の時間だ。

「なあ」

赤石は交渉を始めた。

「・・・」

サトシは黙っている。

というよりかは、考えているように感じだ。
サトシの心は揺れているはずなのだ。
信用のおけない奴らに不信感を抱いている。

「さっきの話、どうだ？頼むよ、逃がしてくれよ。約束する、誰にも言わない、更にアンタの姉ちゃんを助けよう」
当然ではあるが、助ける気など毛頭ない。
犯罪者のために誰が金など払うか。

「……本当に……」

サトシが口を開いた。

「本当に姉ちゃんを助けてくれるか」
搾り出したような声だった。

「……あ・ああ・勿論だ、約束するよ。」

赤石はサトシの悲痛の叫びにも似たこのか細い声に戦慄を覚えた。
予想していた返答と違っていたからだ。

結局は金のために、自分のことだけを考えているものだと思っていた。
た。

その姉の病気もそんな重たいものではないと決め付けていた。

だが、サトシの言葉は違う。

自分はどうなつてもいいから、姉だけは助けてくれという、願い、
祈り。

すぐれるものなら何でもすぐる。

切羽詰っていることがわかった。

誘拐もやりたくてやっているわけではなく、それしか方法がなかったのだ。

姉を助けるための大金を得るためには、それ相応のリスクが伴う。

そうなる疑問が残る。

サトシ達には「依頼人」がいるのだ。
その目的がまだわからない。

「おい・・・」

サトシの呼びかけに、我に返った。

「いいか・素早く逃げろよ」

そう言いながら、赤石の手の縛りを解き始めた。

「・・・！」

サトシは本気だ。

本気で姉のために自分を逃がすつもりなのだ。

「ちよっ・ちよっとまで！」

赤石はサトシの動きを止めた。

怪訝な顔をしてサトシは赤石を見た。

「まだ早いだろう。もう少し状況を見てから行動に移そう。いきなりすぎる。もう少し、もう少し待とう。2人だけの秘密だ。」

訳のわからないことでまとめて、トイレで用を足し、小屋へ戻ろうとした。

サトシは不思議そうな顔をしていたが、段々不機嫌な顔になっていった。

それもそうである、自分の必死の覚悟を止められたのだ。

仲間を裏切ってまで姉のためを思った行動を止められたのだ。

嫌で複雑な気分になるのは当たり前だった。

赤石はサトシの気迫に圧倒されたのだ。

自分は裏切るつもりでうわべだけの言葉だったが、その言葉にサトシは本気で姉の人生を託してきた。

その姿に赤石は今まで感じたことのない感情を覚えた。

第26回 七星亮太の大演説

「飲み物でも買ってくるよ。」

警察の人間や、大路社長への気遣いなのか、秘書の大谷明は出て行った。

出て行ったのを確認してから七星亮太は話し始めた。

「おい、みんな。警察がくると変なことは話せないぜ、とくに秋、いいな」

「・・・」

穴吹秋はそっぽを向いた。

「いいか、最後の確認だ」

亮太は覚悟を決めた。

「圭介が、今回の事件、自作自演だなんて、本当に思っているのか？」

亮太は全員の顔を見た。

「あいつが自作自演して、それを見た目撃者を殺害したと本当に思っているのか？」

しばしの沈黙の後。

秋が喋った。

「俺は圭介の自作自演だと思っている。殺しはどうかかわらないが、もし、見られたのならイメージダウンを恐れて、そういった行動もやりかねない。それだけ今の地位は絶対に踏み外してはいけな場所なんだ。」

完全に赤石圭介のことを、秋は信用していない。

この言葉で秋は、この度の事件は全て赤石の仕業だと言い切ったよ
うなものだ。

「僕も・・・」

続けて三井健二が申し訳なさそうに口を開いた。

「圭介が、自分でやったと思うな・・・もちろん、殺しは違うよ。
あいつはそこまではしないよ。でも・この誘拐は・・・」

最後がよく聞こえなかったが、赤石の仕業だと言いたいのだろう。

「俺も・・・殺しはないと思うよ。でもな・・・この誘拐は圭介だと思
う。不自然だよ、事前に知るはずもない予定を知っていたり、脅迫電
話も１回だけ。あまり積極に交渉しようとしているとは思わない。
やっぱり・・・圭介の自作自演だ。」

沖山誠二が最後に意見を言った。

「・・・わかった・・・」

そう言って立ち上がるうとする亮太へ被せる様に秋が口を挟んだ。

「お前の意見を聞かせるよ」

秋の言葉を背に受けた亮太は振り返った。

強い意志を瞳に託して。

「圭介は何もしてはいない。巻き込まれたんだ。絶対に。」

亮太は、はっきりと言った。

「確かに高飛車で態度もデカくなった。思いやりも欠けているかも
しれない。今のあいつなら・もしかして・・・考えるのもわかる。
だが、それはあいつとの付き合いが薄い奴らの思うことだ。ああい
う態度は、誰だってなるさ。あれだけの才能だ、調子に乗らない方
がおかしいだろ。」

秋が何か言いたそうだったが、遮るように話を続けた。

「あいつの才能が開花する前の時はどうだった？この世界に入る前は？あいつはあんな奴だったか？」

「だから調子に乗ったから、高飛車に……」

「違う！人を殺したり、自作自演をするような奴だったのか？！」
亮太は声を荒げた。

自分の本当の力がわかり、周りがチャホヤしてくれる。
世間が自分の一言を待っている。

そんな状況で、たかが、17年しか生きていない若者ならば、調子に乗ることもある。

それは一時的なもので、いつかは直っていくものだ。

自分で気づくのか、気づかされるのか。

亮太はそんなことを言いたいわけではなかった。

もつと根っこの部分。

人間性、本性の部分。

赤石圭介は・・・人殺しや、凝った誘拐事件を起こすような人間だったのか？

いくら大事な地位とはいえ・・・だ。

「お前達は・・・いや俺も含めて、妬んでいたんだ、あいつの才能に妬みと、あいつの調子に乗った性格、そして今回の事件。無理矢理繋げているだけなんだよ。目を覚ませよ、事件だけを見て、よく考えよう、あいつは、圭介はそんなことする奴じゃない！」

亮太は立ち上がった。

「今まで俺も正直半信半疑だったよ。でもこれで覚悟が決まった。俺は圭介を信じることにしたよ。」

亮太の力説を見た3人は、言い返せることができなかった。

そして。

秋、誠二、健二が何も喋らなくなって、数分後に、倉橋と名乗る刑事が事務所に現われて、数人の捜査員が入ってきた。その後ろで不機嫌そうな顔の大路社長の姿もあった。

つづく。

第27回 テツの不安な脅迫電話

テツの携帯が鳴った。

こんな時に鳴らすのは、ただ一人、依頼人しかいない。
やっと連絡してきやがった。

心配そうにイクオが見ている。

サトシは・・・赤石のトイレに付いていつてから少し様子が変わだ。
赤石は再び手足を縛っている状態に戻した。
ヒロはじつとこちらに視線を向けている。

素早く手に持ち、耳に当てた。

「・・・・はい」

静かにテツは言った。

「すまない。手違いがあり、連絡が遅くなった。」

そう、この声だ。

顔は知らないが、テツに話を持ちかけてきた依頼人の声に間違いない。

「手違いどころじゃない。一体どうなってやがる。誘拐だけさせて
おいて。その後の行動が全然じゃねえか。勝手に電話切るし、監視
役のヒロも一切答えやがらない。」

自分にしては珍しく捲くし立てた。

「本当にすまない、早速だが、これからの段取りを言う、至急取り
掛かってくれ。まずは事務所へ電話をしてくれ、脅迫電話だ。あと
の段取りはそのヒロに伝えている」

その言葉を聞いて、テツは被せるように話した。

明らかにおかしいところがあるからだ。

「ちよつと待て。ヒロが段取りを知っているのなら、最初から動かせばいいだろーが。こいつは俺達は何を言っても無視しやがる。何を考えているのかわからねえ」

「彼はね、僕の指示しか聞かないんだよ。ヒロに言ってくれ・・・オージへの段取りを始めろ・・・と。」

「ちよつとまて」

テツはヒロに向かって、教えてもらった台詞を伝えた。

ヒロは無言でメモ用紙を取り出し、テツに渡した。

そこには、脅迫電話先の番号、金額などが書かれていた。

何なのだ、このヒロという男は。

依頼人の奴隷なのか。

「それから、ニュースで知ったかもしれないが、あの目撃者殺人は、偶然だ。心配しないでくれ。確かにあの殺された彼は君達が林に突っ込んだのを見たのだろーが、結果的には良いことに転がっている。殺した犯人に礼を言いたいくらいだな。・・・まあ余談はそこまです。健闘を祈る。」

それだけ言って、電話が切れた。

テツはメモを広げた。

事務所オージの電話番号。

必ず社長と交渉をすること。

身代金額は・・・！！？

なんだ、この途方もない金額は。

そんな金額を、ただの芸能事務所が簡単に払えるのか？

そんな金額を、このクソガキのために払うのか？

一旦電話を切って様子を見る。

その後、しばらくして再度電話をかけて、相手の状況、意思を聞く。そこで初めて金の用意する時間などの指示・条件・。

まずは電話だ。

テツは携帯にオージの番号を入れようとした時、横からヒロが自分の携帯を突き出した。

そうか、自分の電話だと例え非通知でもすぐにアシがつくかもしれない。

この電話は恐らくある程度は調べられていてもすぐにはアシがつくことがないのだろう。

相変わらず無言のヒロから携帯を受け取り、電話番号をプッシュした。

「・・・・・・？」

何か変な違和感がテツの頭を駆け巡る。

おかしいところがあつたのだろうか。

何か・・・変なところが・・・。

確かにあの殺された彼は君達が林に突っ込んだのを見たのだろうか。

・・・・・・？

確かに・・・・。

林に突っ込んだ・・・・。

見たのだろうか・・・・。

「はい、オージです」

テツを現実に戻したのは、若い男の声だった。

う
う
う
う
う

第28回 事務所オージは人でいっぱい

倉橋刑事とその他数名の捜査員が、脅迫電話に対しての準備を始めた。

大路が機嫌悪く一緒に帰ってきた。

「・・・大谷はっ」

吐き捨てるように言った。

「今・皆に飲み物を買いに」

「ふん」

大路は無然とした表情で、ソファに腰掛けた。

「さっきかかってきた電話のことで聞きたいことがあるんだけどね」
倉橋刑事が優しく聞いてきた。

「あ・はい・出たのは俺です」

七星亮太が軽く手を挙げて、倉橋の質問に答え始めた。

穴吹秋、三井健二、沖山誠二の3人は静かに捜査員の準備を見ていた。

まだ逆探知や何も準備できていない状態だった。

突如、事務所の電話が鳴り響く。

ピンとした空気が張り詰めた。

全員が顔を眺め始める。

「よし、申し訳ないが、七星君、さつきも君が出たから、もう一度君が出てくれ。そして、大路社長に替わるんだ。おい、録音の準備だけでもするんだ。」

倉橋が指示を出した。

「大路社長、いいですか、相手から出来るだけ情報を貰うんです。感情的になつてはいけませんよ。」

子供に伝えるような言い方の倉橋に、ムツとしたのか、大路は「わかつとる」と悔しそうに言った。

「録音の準備ができた、七星君、いいぞ」

倉橋がGOサインを出した。

丁度、大谷が両手にジュースなどが入ったビニール袋を持って帰ってきた。

表情に驚きの色が出ている。

帰ってきたら、事務所の中は捜査本部のようになっていたのだ。

しかも犯人からの電話。

驚くのも当然だろう。

大谷の姿を確認した大路は静かに睨んだが、本人は気づいていない。

七星亮太がゆっくりと受話器を取る。

「はい、オージです。」

一瞬だが、亮太の顔色が変わる。

少し言葉を返して、「はい、替わります」と言い、受話器を大路へ渡した。

受け取った大路も少し緊張した面持ちで「大路だ」と震えた声で言った。

「……ああ・無事なのか？ウチの赤石は」

感情的になるなと前もって言われていたのが効いたのか、かなり抑えた様子で受け答えしている。

だが、それも、長くは持たなかった。

「なっ！なにいっ！ふっふざけるな！そんな金・・・なっおい！おい！」

切れた・・・。

捜査員はすぐに巻き戻しを開始して、再生ボタンを押した。

「はい、オージです。」

「社長か？」

「いえ、違います」

「社長いるか？」

「はい、替わります。」

「大路だ」

「もう知っていると思うが、アンタんとこの赤石圭介を誘拐した。」

「・・・ああ・無事なのか？ウチの赤石は」

「今のところはな、さて、本題に入ろう、我々の要求は・・・10億。」

「なっ！なにいっ！ふっふざけるな！そんな金・・・」

「いいな、よく考えろ、また電話する。」

「・・・なっおい！おい！」

全員の溜息が出る。

10億・・・。

捜査員達が録音テープの検証を始めている、横で、七星亮太が一言
呟いた。

「機会音声じゃなかった・・・」

つづく。

第29回 アカケイは閃いてたまらない

赤石圭介はさっきの電話のやり取りを聞いて、呆然とした。

10億・・・？

身代金が・・・？

ふざけんな、まさか、お遊びで誘拐したんじゃないだろうな。事務所が払うわけないだろうが。

「お・おい・テツ」

運転手だった気弱な男が、リーダー格の男に心配そうに話しかけた。

「そういう指示だ、イクオ、俺にもわからん」

テツはそのまま、携帯電話をあの無口な男に返して、溜息をついた。

今頃事務所はどうなっているのだろうか。

やはり、自作自演だと思われるのだろうか。

誰も助けになんてこないかもしれない。

くるわけがない。

こんな自分を。

金の問題ではない。

自分自身は助けるだけの価値のある人間なのか・・・。

思えば、我儘を言ってきた。

気に入らない奴がいれば、一言でクビして、気に入った女がいれば一言でモノにしていた。

それは今のこの人気で培った立場だからだ。

何を言っても、何を求めても、手に入る。

他人のことなど関係ない。

例えばそれが、同じメンバーでも。

亮太達にも失礼な態度をとっていた。

自分一人でSGMは成り立っているなどと思い上がっていた。
本当は違う。

あいつらがいてこそ俺なんだ。

それを勘違いして調子に乗って・・。

もし、その地位が何もなくなったら・・どうなる？

きつと自分の周りには誰もいなくなるだろう。

人間として・・認められているのか。

単に、人より、少しだけ、少し早く才能が目覚めただけじゃないか。

その才能を更に磨いているのか？

いつか努力している者に追いつかれ、追い抜かれる。

毎日を精一杯生きているのか？

一日をチャホヤされてダラダラ生きているだけだ。

サトシのように、何かに自分の全てを懸けることが出来るのか？

そんな無謀なこととはしない・・・・・。

いや・・いや・・何を思っている。

犯罪者の行動を見本に考えるなどと、愚かなことはするべきではない。

どんな理由であれ、犯罪を犯すことは許されない。

身内の命がかかっていようと・・。

そんなことが許されるのなら、理由さえあれば、何をしてもいい世の中になる。

真犯人・つまり・依頼人は俺のこの傲慢な態度に腹を立てて、俺を誘拐したのだろうか・・・。

突如、赤石の頭に電撃が走る。

何かが閃いたような気がしたのだ。

全てではないが、少なくとも、誘拐の本当の目的を。

誰かに教えなければ、赤石はモゾモゾと動き、声を出した。

だが、前にも増してキツく口にテープを貼られた状態では上手く話せない。

傍にいたサトシも、さっきの外での一件で怒っているのか、無視を決め込んでいるし、近くにも寄ってもこない。

早く伝えなければ、この事件は別の何かが動いていることを。

そんな赤石の思いは届かず、テツはもう一度、事務所に電話をかけた。

つづく。

第30回 倉橋刑事の密かな疑問

脅迫電話の検証もままならない状態が続く。

大路は先程の法外な金額に頭にきている。

秘書の大谷が必死でなだめていた。

「社長、赤石の命がかかっているんですよ。」

「うるさい！貴様に言われんでもわかっている。」

大路は大谷を睨み付けた。

「わかつているが、10億だぞ！10億もの金を、そう簡単に出せるわけないだろうが！」

「ですが……」

「ええいつ！少し黙っている！」

そんなやり取りを見ながら、倉橋は2に人話しかけた。

「どうでしょうか？犯人の動きがわからないことですし、また電話があつたら、要求を受ける意思を示してはいいかがですか。そこから話を進めないと赤石君は2度と帰ってきませんよ。」

もつともな意見に2人は静かになった。

「そ・そうですね、まずは要求を呑む態度を出さないと……社長」

「むう……仕方あるまい……」

方向性が決まったところで、大路と大谷は急に無口になって、ソファに腰掛けた。

倉橋はそんな2人を気にしながら、作業に取り掛かった。
録音状態をちゃんとして、逆探知もできるようにしておかないとい
けない。

先程の電話では何も情報を得られなかった。

犯人も落ち着いて話していたが、少し、台詞を言わされているよう
に感じた。

何か電話の先の音が拾えるかと思ったが、何も聞こえてこなかった。

ふと倉橋が辺りを見回すと、SGMのメンバーである、七星亮太が
難しい顔をして座っていた。

離れた場所に、残りのメンバー、沖山誠二、三井健二、穴吹秋の3
人が無言で座っていた。

事務所に入る時に4人が揉めていたようだった。

恐らくは赤石の件だろう。

芸能界のグループは思っていたより仲が悪いらしい。

「どうしたんだい？そんな顔をして。」

倉橋はさり気なく亮太に話しかけた。

「・・・えっ・・・いや・・・」

不意を突かれて、亮太は慌てたが、すぐに落ち着きを取り戻し、冷
静に話し始めた。

誰かに聞いてもらいたかったのかもしれない。

「さっきの電話のことですが・・・」

「うん？」

「機械音声じゃあなかったんです。」

最近の若者は伝え方が下手くそだというのが本当だなと倉橋は思った。機械音声とはつまり、TV番組でプライバシーを守るために出演者の声を意図的に変えることを言っている。

「うん、それがどうしたんだい？」

変に突っ込んでプライドを傷つけてはなるまいと話を続けた。

ただ、確かに電話の声は普通の声であった、亮太の言う機械音声ではなかった。

「俺は一番最初に出た時なんです、倉橋さんや大路社長がいなかった時の。」

亮太は思い出すように話す。

倉橋達がこの事務所へ来るきっかけとなった電話である。

誘拐事件でありながら、事務所に捜査員を一人も行かせてなかったことは完全にミスだった。

言い訳はできない。

また上から罵られる材料を作ってしまった。

動かすようにしていたのだが、急な目撃者、殺人事件で、それどころではなかった。

「うん。それが何かおかしかったのかい？」

「はい。最初に出た時の、犯人の声は、その機械音声だったんです。でも・・・2回目は・・・」

なるほど、それはおかしい。

最初と次が違う行動。

こういう深刻な事件では犯人の立場でもあつてはいけないことだ。事件解決へのきっかけになりかねない。

「それは・・・おかしいね・・・話し方とかどうだった？」

「うーん・・・ちょっとだけ・別人だったような・・・」

亮太がそう言いかけた時、3度目の電話が鳴った。

緊張が走る。

倉橋は大路に電話に出るよう指示をした。

つづく。

第31回 七星亮太の妙な感覚

七星亮太は鳴り響く電話の音を黙って聞いていた。
もう、うるさい音には感じない。

倉橋刑事の指示で録音状態が確認された。
今回は全員に声が聞こえるよう小さいスピーカーを付けられてる。
倉橋刑事が大路社長にGOの指示を出した。

大路社長はゆつくりと受話器を取った。

「大路だ」

「どうするか決めたのか？」

いきなりの決断を求めてきた。

2回目と同じ声だ。

機械音声ではない。

倉橋刑事と目が合って、頷いた。

「ああ・あんたらの要求を吞もう。」

「・・・・・・そうか。」

犯人は意外だったのか、しばしの沈黙が流れた。

「ワシはどうすればいい？」

「金の用意はいつでもできる。」

大路社長は倉橋刑事を見た。

倉橋刑事は時間を取れと言っているのだろうか、手を広げるように

ジャスチャーをした。

「明日まで待つてくれないか。」

「駄目だ、3時間待つ、いいな。」

無茶だ、と亮太は思った。

時間もそうだが、金を集める動きすらしていないのだ。

集めるとしたら、どういうルートで実際集めるのかわからないが、3時間では間違いなく集らないだろう。

「待て、3時間は、無理だ。」

「なんとかするんだな、さもないと、赤石の命はない。」

犯人の男は、3時間後に、ここから南のある廃墟に金を持ってこいと告げた。

その廃墟は数十年前、何かの会社だったビルで、当然だが、誰もいないはずだ。

そこが身代金の指定場所だ。

「おい、赤石は無事なんだろうな。」

大路社長の問いかけに男は答えず、代わりに別の言葉を発した。

「本来ならば、社長が一人で来いと言いたところだが、あんたみたいな男は逃げるかもしれん。」

「馬鹿なっ！ワシがそんなこと・・・。」

「そこで、誰か一人、助手を付けろ。10億は大金だ、運ぶのも大変だろうからな。」

亮太は、犯人の声に変な感触を受けた。

「社長一人でモタモタしている内に、恐らく傍にいらっしゃる警察が踏み込んできたらたまらんからな」

倉橋刑事が軽く舌打ちした。

「ただし、助手に警察の人間がつくと困る、そこであんたのところの社員に限らせてもらう。こっちには全社員、全タレントの資料がある。現場に来た時に確認させてもらう。」

「待て！貴様一体・・・！」

「3時間後だ。」

電話が切れた。

捜査員が慌しく動き始めた。
逆探知は失敗だった。

倉橋刑事は亮太に話しかけた。

「どう思った？七星君」

「はい・・・はつきり言つて。変です。」

「うん、同感だ。」

倉橋刑事は笑顔を見せた。

身代金や、受け渡し場所の説明をしている時に、感じた変な感触。指示をしている、犯人自身がこの方法に疑問を抱いている。そう感じたのだった。

倉橋刑事も同じ感触を受けたようだった。

「あの・・・」

横から今まで黙っていた、穴吹秋が話しかけてきた。

「さっきの助手って・・・俺達の誰か一人でもいいんだろ？」

亮太は秋の顔を見た。

自分自身の目で確かめる気なのか。

確かに、大路社長が赤石のことを聞いた時に、一切触れずに話を進めた。

赤石が言わせていると疑っているのか。

「それなら僕を連れていってくれよ。」

「いや俺だ。俺を助手にしろ。」

三井健二と沖山誠二も立ち上がった。

「き・君達」

倉橋刑事は困った声を出した。

つづく。

第32回 テツはアカケイの話に耳を貸す

テツは電話を切って、異様な只ならぬ不安に覆われた。

拭い切れぬ不安、違和感、疑問。

電話をかける前から感じていた。

その不安は、電話をかけた後で確信へと変わった。

さつきから、今まで最大ではないだろうか、赤石が身動き出来ない状態にも関わらず、大騒ぎを始めた。

あまりの騒ぎ方に、サトシもイクオも立ち上がって、赤石の傍へ寄った。

ヒロだけは冷静に見ていた。

「なんだ、こいつ。」

サトシが驚いて赤石を見る。

「イクオ、口のテープを剥がしてやれ」

テツの指示通りにイクオが剥がすと同時に悲鳴にも似た叫び声が出た。

「お前ら、よく考えろよ！利用されてるんだ！金なんか貰えるわけねえ！早く逃げる！逃がしてくれ！」

いきなり、不安に思っていた核心を突いた言葉だった。

「こいつ。」

サトシが口にテープをもう一度貼り付けようとしたが、テツがそれを止めた。

「どうしてそう思う？」

テツは赤石に問いかけた。

それを受けた赤石は、意見を聞いてくれるということなのか、ほっとしたように少し笑顔を見せた。

「俺も最初はもしかして・・・という感覚だった。だが、さっきの電話を聞いて間違いないと思ったよ。」

もったいぶった言い方だ。

「続ける。」

「犯人の本当の目的は・・・俺・・・いや・身代金じゃない。」

サトシがあつけにとられている。

イクオも不安が的中したのか、複雑な表情だ。

「じゃあ・なんだ？」

「本当の目的は・・・大路社長の命だ。」

沈黙。

赤石は続けた。

「あんたらの依頼人・・・つまりは真犯人というべきか。そいつは俺の事務所オージの人間だ。」

「俺達を納得させるだけの根拠はあるのか。」

横目でヒロを見る。

その顔に動揺の色は見えない。

「最初におかしい所は、俺の自作自演でも言われていた、ロケバス

「があそこを通るということをなぜ知っていたのか。」

それはヒロが依頼人から聞いてきた情報だ。

「今のこの状況で、俺の仕業だなんて、あんた達はまさか思いはしないだろう？ そうなると、依頼人からの情報になる。」

「・・・・・・・・」

「わかるだろう？ 俺の予定を知るのは、俺の事務所の人間だけだ。」

「事務所の人間がどうして大路を？」

「大路社長は、恨まれることをやってきた。まさに絶対王政での暴虐無人な人だ、殺されたって疑問はないよ。」

その動機にはどうも説得力に欠けるとテツは感じた。

「とにかく、目的は大路社長だ。そう確信したのは、さっきの電話での内容なんだ。」

「内容？」

恐らく・・・・自分の持った違和感と同じ部分だということテツは悟った。

「あんたはこういったよな。誰か一人、助手を付ける・・・って。普通は一人で来させるもんだろう？ それを無理矢理の理由でこじつけるように言っても違和感があるだけだ。あんただってそう思っただろう？」

その通りだ。

テツも同じことを思った。

一人付けるといふことは無理がある。

仮に警察の人間が付かれても、こちらには知る術はない。元々、社員やタレントの資料などあるはずないからだ。

「一人付けるといふのが・依頼人の指示であつたといふことは・・・
・・。」

背筋が凍る。

「大路社長の助手として付いてきた奴が・・・依頼人・・・真犯人だ。」

赤石の言葉を否定できるだけの理由をテツは持ち合わせていなかった。

つづく。

第33回 テツの覚悟は逃げ出す覚悟

「結局は大路社長の命が本当の目的かどうか分からない。でもこれだけは言える。」

赤石は強い意志を込めて話す。

「誘拐は俺じゃなくても良かったってことだ。誰でも良かったんだ。俺達は利用されたただけだ。」

なんてこった。

赤石を信用しているわけではないが、聞けば聞くほど、赤石の言っていることが本当に思えてくる。

テツは頭がグラグラ揺れている錯覚に襲われた。

赤石は続ける。

全てのを吐き出すように。

「身代金10億っていうのも、そうだが、それを3時間で用意しろなんて無理に決まっている。」

そうだ。

だから、自分の口で話していても言葉に自信が持てなかった。

「あんたが指示した、廃墟の方面は、事務所から1時間はかかるんだぞ！実質2時間でどうやって用意できるんだ。」

テツは依頼人と話した時のことを思い出す。
その時感じた、違和感。

（あの目撃者殺人は、偶然だ。）

（君達が林に突っ込んだのを見たのだろうか）

（林に突っ込んだのを見た）

（林に突っ込んだ）

テツは、ヒロの方へ振り返った。

ヒロは人形のようにその場に立っていた。

冷たい目。

何も言っていない。

林に突っ込んだことなど、依頼人には報告していない。

殺された三波晴之が、目撃したことは、ニュースなどで予想がつく。だが、林に突っ込んで事故したことなどは、絶対に知るはずない情報だ。

それを、なぜ、依頼人が、あの段階で、知っていたんだ。

簡単なことだ。

目撃者殺人は偶然ではない。

口封じに間違いなく殺したのだ。

誰が……？

それは……ヒロに違いない。

事故をして、目撃されたのを、見ていたヒロは、依頼人に報告。指示通りに口封じをして、この小屋に現われる。

何食わぬ顔をして、俺達に指示を伝えている。

……と同時に、監視もしている。

いつか、依頼人の本性に気づき、逃げ出すかもしれないことに備えて。

「冷静に、考えれば、あんた達ならわかったことだ。それが、どうしても金が欲しいという焦りで、判断を鈍らせたんだ。」

赤石が生意気にも分析を始めた。

「仕方ないさ、サトシなんかは姉ちゃんを助けたいがためだろ？ 必死になるのは無理もない。」

サトシが叫んでいたのを、聞き覚えていたのか、なかなか抜け目ない奴だ。

「うつうるせえ！ 俺達はもう元に戻れないんだよ！」

同情されたと思ったのか、サトシが怒鳴った。

間髪入れずに赤石が言葉を被せた。

「だから、俺があんた達の必要な金を出してやる。逃げよう、これで解決だ。」

「そんな保証はどこにある？」

イクオが怒りを抑えて声を出した。

利用されたかもしれない不安と、サトシの言う通り、元に戻れない苛立ち。

一体何を信じて、何にすればいいのか。

「・・・正直言ってさ、最初は、払う気なんて全然なかったよ。」

「なに！！」

サトシが赤石を睨んだ。

やはり、さっきの2人きりで何かあったのだ。

「でも今は違う。やったことは間違いだけど。身内を助けたいという目的は、悪いとは思わない。やり方が違ったただけだろう？」

こんなクソガキに心揺さぶられる言葉が出ようとは思わなかった。助けない。

俺は、助けたいんだ。
愛する人を。

わかった・・・と言いかけた時。
鋭い視線が身体に刺さる。

立ち塞がるのは、その無言の大男、ヒロ。

確信した。

目撃者を殺したのは、こいつだ。

そして、依頼人は初めから大路の命が目的だったのか。
誰だろうと構わない。

大路と一緒にしてきた奴が、依頼人だ。

ここから、逃げ出して、そいつの顔に1発くれてやりたい。

ヒロの姿を見たテツは一度踏み入れたりリスクのある仕事、抜けるの
も相当なリスクがあることを覚悟した。

つづく。

第34回 大路公康と一緒にいる者

車は走る。

大路を乗せて。

2人きりの世界。

身代金はない。

ダミーの金、表面上は本物で、残りは偽物。

これで誤魔化して時間を稼ごうということだ。

この狭い空間で、沈黙の時間が流れる。

全ては計画通りか？

金など関係ない。

予定通り、大路に助手をつけるようになった。

別の人間が指名されるとマズイので、マネージャーや受付などを、早退させたことも結果的には良かったかもしれない。

自分がついていくと手を挙げた時に、誰も反対はなかった。

他にも立候補している者はいたが、あっさりと引き下がってくれた。むしろ、それが当然のようだった。

両親は小さな下請け会社を細々とやっていた。

決して裕福ではない、なんとか生活できるだけの収入だが、幸せだった。

大路が現われたのは丁度そんな時。

昔から仕事の付き合いで断りきれない父の立場を利用して大路は甘い言葉で言い寄ってきた。

今よりも仕事を紹介してやる代わりに、その売上の数パーセントを大路個人に渡せというのだ。

それが犯罪だということは、当時の自分には理解できなかった。バレないのであれば・・・仕事を回してくれるのであれば・・・と断れないところである。

だが、父は生真面目な人間であつた。

いくらお得意様でもそんなことはできないと大路の申し入れを断つた。

それから、大路の仕事は全て止まった。

売上の急落、それでも、なんとか僅かなお客だけを頼りに頑張つた。しかし、大路はそのお客にも根回しをし、完全に父が干されるような状況を作つたのだ。

そして、最後はどうにもなくなつて、父はプライドを捨てて、大路に泣きついた。

この仕事を他所へ渡されると倒産すると泣き付いたが、大路は耳を貸さなかった。

そのまま、倒産、多額の借金を背負い、両親は自殺した。

残された自分は、施設へ入れられたが、大路への恨みは消えることなく数年が経つた。

気づけば・・・大路が芸能会社を設立しているという・・・。

もうすぐ、目的地だ。

大路は覚えているのだろうか。

この廃墟が、大路によって潰された、父の会社だということを。

僕は車を停めて、ゆっくり大路に振り向いた。

大路はいつものように睨んできたが、僕の笑顔を見て絶句した。もしかしたら、普通の笑顔に見えなかったかもしれない。

殺したくてたまらない、やっと、その機会が巡ってきた嬉しさから
出た笑顔だ。

「おっ・・・おい。」

大路にしては、情けない声だ。

顔色が変わっていく。

段々、全てが見えてきているのだろうか。

「降りろ。」

僕は、ナイフを取り出して、大路に向けた。

「・・・どういいうつもりだ。・・・お・・・大谷。」

大路の声が裏返った。

つづく。

第35回 真犯人は回想する

赤石を誘拐させて、ヒロの指示通りに脅迫電話がかかり、今、この状態に持つていくのが一番の方法だった。

そこで、大路を死に至らしめ、誘拐犯に殺されたことにする計画だった。

ここまで狂ってくるとは、計画というものは、あってないようなものだと思う。

いきなりの誤算は、目撃されたことだ。

捜査本部に連絡して、倉橋刑事からその情報を聞いた時には本当に驚いた。

すぐにヒロへ連絡をしようとしたが、ここでも予想外の展開になった。

大路がその喫茶店へ行くというのだ。

なんとしても早く手を打たねばならない。

大路が勝手に車を降りたのを見届けて、すぐにヒロに連絡をする。情報を聞き、指示をした・・・目撃者を殺せ・・・と。

予定外の展開で嫌な予感があった。

結果、その予感は当たった。

大路が喫茶店に到着と同時に警察と鉢合わせしまったのだ。事情聴取。

この傲慢な豚のせいで計画が狂う。

大路を事務所に呼び戻さねばならなかった。

事務所に戻った時に、テツから連絡で携帯が鳴った。

チャンスとばかり、事務所を出るフリをして外に出た。

すぐに電話を切って、外から事務所に犯人として電話を入れる。
予め手に入れていた声が変わる機械を使い、1回目の電話。

後は辻褄を合わせて、脅迫電話がきたことを警察に報告、大路を呼び戻す段取りが出来た。

飲み物を買に行く途中にテツへ連絡する。

指示通り、テツが脅迫電話をかける…………。

そして…大路を…廃墟へ向かわせる。

助手を一人付けて…僕が立候補して…………。

なんとかここまで軌道修正した。

最後は…この男を…この豚を殺す。

それで僕の復讐は終わりになる。

「……まつ待て！大谷！なんでだ！どうしてだ！」

大路は真っ青になって車から飛び出した。

逃がしはしない。

「……………この廃墟になったビルを覚えていますか。」

大路はピタリと足を止め、しばらく動かなかったが、少しずつ、ガタガタと震えだした。

「まさか……………」

「殺したくて……殺したくて……！殺したくてえ！」

自然と声が大きくなる。

「殺したくてたまらないのを、なぜ今の今まで我慢してきたかわかるか?!」

「あ．．あ．．」

大路はその場に尻餅をついた。

「貴様に最後のチャンスを与えてやったんだ！もしかしたら、心変わって、世のため人のために生きるかもしれないってな！」

ナイフを大路の目の前に突きつけた。

「ひいつ」

「それが、結局全然変わらない。貴様は自分のことしか考えていない。少しでも今までの悪事を反省し、償う素振りでもあればと．．期待したが．．。」
ゆっくりと近づく。

「たったっ．．助け．．．」

「．．いや．．むしろ変わってなくて喜ぶべきか．．．。罪悪感なく、貴様にこのナイフを突き刺せるんだからなあ！」
僕はナイフを振り上げた。

「待て！大谷い！」

後ろから聞こえる、大路とは別の声。

ああ．．そうか．．やはり．．騙し切るのは無理か．．．。

僕は振り返る。

そこには。

拳銃を僕に向けた、倉橋刑事が、立っていた。

うん

第36回 大路公康絶対絶命

なんて名前だ？

あの家族はなんて名前だった？

大谷？

覚えていない。

子供がいたような気はする。

あれが、この大谷明なのか？

大路公康は混乱した頭で同じことを繰り返し考えていた。

大谷は倉橋の方を見ながら笑っている。

倉橋とその他の捜査員、そしてSGMのメンバー4人が後ろにいた。

「おっおい！早く！早く助けんかぁ！」

大路は大声を出した。

・・・が、その声を掻き消すくらいの声が倉橋の口から出た。

「黙ってる！クソ野郎！！」

「・・・なっ！なんだと！」

このワシになんとという口の聞き方を・・・

「大谷、全て調べた。お前も過去もな。気持ちわかる。だが復讐は駄目だ。やめるんだ。」

倉橋の説得を聞いた大谷は、くつくくつ、と笑い出した。

「よくわかりましたね・・・倉橋刑事」

「お前のためらいもなく助手への立候補。これだけで判断するのはどうかと思うが、勘も俺の武器だからな。とにかくそこが引かった。」

倉橋はジリツと近づいた。

そんな小さな動作で間に合うものか。

「それから、従業員へ早退の指示。段取りが良すぎる。まるでわかっていたかのように。」

大谷は笑みを崩さない。

「受け渡し現場を調べて発覚した、大谷という名前、大路との関係。それで全部わかった。」

「なるほど・・・大路への望みのために、名前は偽名にできなかったが、それが仇になったわけだ。」

大谷は溜息をついた。

「それで？倉橋さんは、どうしたいのですか？僕にこの豚を殺させてくれないのですか？」

「当たり前だ。そんなことはさせない。大路に酷いことされたのは同情する。だが、それを復讐だといって、殺すのは許されるわけではない。」

そうだ！

もつと言え。

もつとちゃんと早く説得するんだ。

大路は気持ちを抑えつつ、逃げ出す機会を窺っていた。

「同情？」

大谷の笑みが止んだ。

「あんたに・・・何がわかる・・・。どれだけ僕達家族が惨めで辛い思

いをしたかわかっているのか！」

大谷は大路を睨んだ。

恨みを越えた、鬼の形相だった。

「このクズさえいなければ！殺せばそれでいい！後のことなど知ったことか！」

大路はバタバタと四つん這いで逃げようとした。
腰が抜けて思うように動かない。

「殺してやる！」

大谷が大路に襲い掛かる。

「ひいひい！」

「大谷い！！！」

一発の銃声が暗い廃墟の中に響いた。

つづく。

第37回 七星亮太は言葉が出ない

七星亮太は瞬きを許されなかった。

「がはっ」

銃声が鳴り、倉橋刑事の拳銃から発射された弾丸は、大谷明の身体に喰い込んだ。

大谷が振り向き様の背中へ。

丁度、前から見ると心臓の位置の辺りになる。

「くそっ、救急車を呼べ！」

悔しそうに倉橋刑事が言葉を吐き捨てた。

どんな人間だろうと、どんな酷い奴だろうと、殺されることは間違えである。

そして、人が殺されるのを黙って見ていることなんて出来ない。

本音は撃ちたくて撃ったわけではないのだろうが、撃たざるを得なかった。

亮太は倉橋刑事の心情を読み取ったような気がする。

大谷はがつくりと両膝を地面につき、そのまま血が滲み出している背中から倒れていった。

亮太を含めて、沖山誠二、三井健二、穴吹秋の4人は身動きが出来なかった。

あまりの壮絶な展開に、意見も何もあつたもんじゃなかった。

誘拐事件自体が自作自演ではないのかという疑惑が、実は、復讐劇の一部にすぎなかったのだ。

その黒幕はたった今この場で撃たれて、地面に崩れ落ちているのだ。

「ひやつ、ひやつ、ひやつ。」

奇妙な声が聞こえる。

大路社長の口から発している。

「ばつ馬鹿め。このワシの命を奪おうとするからだ！ざ・ざまあみる！」

大路社長はひゅーひゅーと擦れた呼吸音を出している大谷の腹を蹴った。

がふっ・・・と大谷の口から血が飛び出る。

「大路！」

倉橋刑事が叫んだ。

「なんだ？ワシは被害者だぞ！命を狙われたんだぞ！貴様らはワシのような一般市民を守るのではないのか？」

醜い笑顔をさらけ出し、おぞましい声で笑う。

さすがの亮太も吐き気を覚えるくらいの不快感が身を襲った。

「・・・くっ・・・くっくっくっ・・・」

虫の息で大谷が笑い出した。

まるで最期の火のように細い声だった。

「まだ生きてるのか、この死に損ないがあ。」

「警察とマスコミにな、ある書類が郵送されてきたよ。」

突然倉橋刑事が話し出した。

「それは、ある人物が、今まで行ってきた悪事の完璧な証拠書類だそう。」

「・・・・・・？」

「その中には既に時効になったものもあるだろう。だが、時効になつていないものもある。」

「・・・そんな」

「つまりどういう事かと言うと・・・。」

「大谷！貴様か！貴様が送りつけたのか！」

何をするにも保険は必要だ。

大谷は犯罪の限界を感じていたのだろうか、大路社長を失脚させるだけの証拠を集めていたのだ。

きっと、自分の親のことを立証できないことがわかって、今回の計画を立てたのだろう。

大谷の笑いはそういう意味だったのか。

「大路、あんたはもう終わりだ。」

倉橋刑事は冷静に告げた。

つづく。

第38回 真犯人の最期の言葉

身体が熱い。

撃たれたのか。

まさか撃つとは。

倉橋刑事もなかなか肝が据わっている。

僕は死ぬのだろうか。

ああ・・死ぬんだな。

復讐も出来ず。

この手で・・あのクズに鉄槌を下すことも出来ず。
僕は父と母の元へ旅立つんだろう。

隣の大路が泣き叫んでいる。

まるで子供だ。

絶望の表情。

僕の送った証拠書類が届いたのか。
くつくつくつ・これで奴も終わりだ。

僕を覗き込む顔・・誰・・？

倉橋刑事・・。

口が動いている。

何を言っているのか・・。

「場所は何処だ？」

赤石がいる山小屋を教えろということか・・。

まあいい。

教えてもいい。

どうせ……。

僕の口は動いているか？聞こえているか？

周りが動き始めた……。どうやら伝わったらしい。

最期に……。やるべきことが……。ある。

「ヒロに伝えたい……。皆を解放しろと……。言いたい。」

倉橋刑事は頷いて、僕の服から携帯を取り出した。

震える手で短縮ボタンを押す。

何回かのコールで電話に出た音。

無言で何も言わないが、電話の先はヒロだ。

伝えなければ……。最期の言葉を。

「止めるんだあ！倉橋刑事い！」

遠くから七星亮太の声が聞こえる。

彼は勘の鋭い奴だ。

僕の本当の真意がわかったのだろう。

撃たれる前に叫んだ言葉。

（後のことなど知ったことか！）

僕が本当は善人でもなく、邪悪な人間に成り下がってしまったことを、亮太は見抜いたのだ。

もう遅い、電話は繋がっている。

倉橋刑事も状況を読めていない。

僕はただ一言、声に出せばいい。

「殺せ」

身体力は抜け、目の前は真っ暗になり、声も、音も、何も聞こえなくなった。

僕は自分の死を実感した。

つづく。

第39回 ヒロは完全なる殺人者

「殺せ」

依頼人である、大谷明の指示を聞いて、ヒロは監視者から殺人者へと精神が変貌していく。

喫茶店で男を殺したように。

大路公康を殺すための計画に手を貸せと言われた時には驚いた。自分の他に奴を恨んでいる者がいたとは。

奴と同じ血が通っていることを想像しただけでも、虫唾が走る。

母を、家族を、ゴミクズ同然のように捨てた男。

結局女手一つで自分を育てた母は無理がたり寂しく死んでいった。あれが自分の父なのだと思うと、我慢ならない。

母に代わり、毎年のように写真ハガキを送りつけていた。

いつか必ず……この手で……と思っていた時だった。

大路に家族を殺されたと言ってきた、大谷明。

自分と同じ思いの仲間は、強い絆で結ばれ、復讐を誓う。

大谷が全ての筋書きを考えて、自分がそのサポートをする。

まずは、誘拐実行犯を探ることになった。

金に困っていて、思考能力が低い奴、考える暇がない奴。

亡くなった母が最後に入院していた病院で、高額の手術をしないと助からない女を見つけた。

その身内であるテツはなんとしても助けたくてたまらなかったはずだ。

名簿などの個人情報盗み見て、連絡先を手に入れる。
あとは大谷に動いてもらう。

誰でも良かったが、SGMの絶大なる人気を誇る赤石圭介を誘拐する指示だった。

最近高飛車なこの若造を懲らしめると大谷から聞いた。

余計なこととは言わずに、大谷の指示通り動く。

誰かを殺せと言われたら迷わず殺そう。

喋るなど言われたら、決して死んでも話さない。

そして、恐らく最後の指示なのだろう、大谷からの言葉。

「殺せ」

ヒロはゆっくりと立ち上がり、自分の携帯電話を叩き壊した。

テツ、イクオ、サトシ、赤石の視線を一点に浴びる。

不気味な雰囲気圧倒されたのか、テツは身構えた。

「……ようやく……本性を現した……ってことか。」

ヒロの精神状態は、もはやマトモではなかった。

生きては返さない。

自分の与えられた仕事を遂行する。

ヒロはここにきて初めてニヤリと笑みを浮かべた。

つづく。

第40回 アカケイは兄弟愛を知る

イクオが手足の縛りを解いてくれた。

赤石は自ら口のテープを剥がして叫んだ。

「ほらみる！ やっぱ俺の言う通りじゃねえか！」

「うるせえ！ 今そんなこと言ってる場合じゃねえだろうが！」
サトシも叫んだ。

「今のは依頼人か？ 俺達を始末しろと言われたのか？」

テツが話しかけるが、ヒ口は何も喋らずにゆっくりと近づいてくる。

ジリジリと後退りする4人。

次第に部屋の隅へと追い込まれている。

運の悪いことに出口はヒ口をすり抜けた先にしかない。

「お・おい、4人でかかりやあなんとかなるんじゃないか？」

赤石の問いかけにイクオは溜息をついた。

「あいつは本気で俺達を殺そうとしている。そんな覚悟を決めている奴と中途半端な考えを持っている奴が勝てると思うか？」

確かに、ためらいもなく襲ってくるだろう。

現に一人、殺害しているのだ。

「おい、クソガキ。」

サトシが赤石に言った。

「あん時の約束だ。逃がしてやる。」

「・・・・・・・・・・は？」

「逃がしてやるから・・・・。」

サトシはヒロへ突進していった。

「なっ・・・・お・お前！」

「サトシ！」

「姉ちゃんを頼むぞ！」

頭から大男の頑丈な身体に向かって突っ込んだ。

こんな所で、こんな状況で、あんな暴走するなんて。

「お前らそんな話してたのか。」

テツが赤石の顔を意外そうに見た。

「あ・・・・ああ・・・・。」

とても、裏切るつもりだったとは言えないし、今はそんな気持ちなど毛頭ない。

「逃げろ！逃げろ！」

ヒロの大きな腕に掴まれて、サトシの身体が宙に浮いて・・・・。

「わあああ」

壁に叩きつけられた。

「・・・・イクオ。赤石を頼む。」

「テ・・・・テツ。」

自分も残ると言わんばかりとイクオが声を出した。

「お前じゃ無理だ、とにかく逃げることだけ考える。」

「・・・あ・あんた。」

なぜ自分を、痛い目にあってまで、逃がそうとするのか、赤石は不思議な顔をした。

「サトシが初めて自分で決めたことだ。それに、サトシの望みは俺の望みでもある。」

「・・・え？」

「大事な弟だしな。」

テツはヒロの前に立ちはだかった。

つづく。

第41回 テツの拳は岩をも砕く

ヒロの視線はテツを見ていない。

素早く出口の扉へ走り抜けていく赤石とイクオへ向けられている。

「どこ見てる。」

テツの声で、ようやくヒロと目が合った。

「追いかけたいのなら・・・俺を倒してからにしろ。」

「・・・・・・・・」

相変わらず喋らない奴だ。

突如ヒロの拳が腹にめり込む。

早い。

「ぐっ」

胃液が逆流する苦しさを感じたと同時に悟った。

勝ち目はない・・・と。

パワーもスタミナも全てヒロが上回っている。

テツはこいつを倒すという目的を、イクオ達の時間稼ぎへと変更した。

外に出させるわけにはいかない。

右拳に力を入れる。

容赦ないヒロの攻撃を一方的に受ける。

どこかで、1発・・・1発だけを打ち込める機会を窺っている。

年齢の差もあるだろうが、重いパンチを何度も受けている内に、足腰が震えだした。

立ってられない、限界だ。

ヒコの渾身の一撃が、テツの顔面を捉えた。

脳が揺れる。

脳震盪なのか、テツの意志とは別に地面へ倒れ込もうとする。

終わった……。

諦めかけた瞳の中に、恋人の顔が映る。

すまない……お前を助けることができなかった。

誘拐なんて……馬鹿なことしたもんだ。

そんなことで得た金なんて……お前が喜ぶはずねえよな……。

ごめんな……アケミ……。

瞬間。

アケミの顔とサトシの顔が重なる。

やっぱり姉弟だ、良く似てやがる。

え？……サトシ……？

我に返ると、サトシがヒコの後ろに飛び掛っていた。

隙が出来た。

まるでそれは、希望の光のように見えた。

待っていた光ではない。

サトシが自分の力で作った光なのだ。

「今だ！ やってしまえ！ テ……兄ちゃん！！」

「う……うおおお」

右の拳を思い切り振り上げた。
ボクシングでいうところのアップーのように、テツの快心の拳はヒロの顎を砕いた。

「ぐえええ」

ヒロはそのまま豪快に倒れた。

やっと聞いた声は「ぐえええ」か。

まさか、サトシの顔で復活するとはな。

いてて・・・とサトシも起き上がり、目が合った。

テツは可笑しくなり、ふふっとお互い声を漏らした。

「があああああ」

ヒロが怒声と共に起き上がった。

完全に油断していた2人に襲い掛かる。

バン。

扉が開く音。

「警察だ！そこを動くな！」

安堵の気落ちからか、薄れていく意識の中、テツはアケミの顔をも
う一度思い浮かべた。

つづく。

第42回 事件終わって

日本中を騒がせた事件は全くおさまる気配がなかった。

世界的に羽ばたこうとしていた人間だったため、メディアもこの事件を取り上げ独自の番組ができる程だった。

人気アイドルの誘拐事件、目撃者殺人事件、事務所社長の悪事、社長殺人未遂、誘拐実行犯殺人未遂。

一つの事件がここまで発展するなど誰が考えただろうか、しかもたった一晩であった事件なのだ。

誘拐された、アカケイこと赤石圭介は、多少の疲労、衰弱はあるものの、命に別状はない。

主犯格とされる、大谷明は、やむを得ず責任者倉橋正一の発砲により死亡。

事務所オージ社長の大路公康は、大谷明の死亡により、命の別状はない。

しかし、ここ数十年の悪行が発覚、失脚は免れない状況となり、別件で逮捕状が出るのを待つ身となった。

誘拐実行犯の3人、テツと呼ばれた三浦哲治、サトシと呼ばれた駒野聡、イクオと呼ばれた斎郁夫はいずれも無事。

反省し自供しているが、誘拐ということを認識した上での犯行として、慎重に取調べが行われている。

目撃者である三波晴之を殺害した、ヒロと呼ばれた成瀬博彦は、実行犯の3人と仲間割れが起き、現在黙秘を続けている。

最も騒いだのはマスコミでもなく、ファンだった。誰かのせいにしたい世間は、主犯格がない以上、実際に誘拐した実行犯へ怒りの矛先が向けられた。誘拐の背景に、身内の病気を治したい一心で・・・ということは認められなかった。そのためには、なんでもやっていいのかということになり、ますますファンの怒りを煽った。

数カ月後。

公判が行われる。

あまりの騒ぎように裁判中をTV公開するという前代未聞のことまで発展した。

法廷には、テツ、サトシ、イクオの3人と、離れた場所にヒロ。証人として赤石が呼ばれた。

被害者として。

つづく。

第43回 アカケイは思い悩んで決断する

赤石圭介は、じっと黙って下を向いた。

捜査に協力ということでは、聞かれた質問は全て答えた。
何も考える余裕はなかった。

テツ達の人間性なども、今思えば誘導された答えだったかのように
思う。

気がつけば、彼らの不利になるような証言をしていた。

そのまま、調書が作られ、みんなの前でまた同じことを証言するた
めにこの場に立たされている。

思い返せ。

彼らは悪か？

考えろ。

後悔はないのか？

このまま彼らの人生を決めてしまうような証言をしていいのか？

彼らの家族はどうなる？

助けたい命はどうなる？

約束したんだ、姉ちゃんを助けると。

だが、あらゆる情報機関が目を光らせている今、手が出せなかった。
ここで彼らのために動けば、マイナスイメージが付き纏う。

この頂点である地位を手放したくない。

あのダラダラとした生活は送りたくない。

これでいいんだ。

これで。

元々、助ける気もなかった、赤の他人だ。

（姉ちゃんを頼むぞ）

サトシの声が頭に響く。

思えば、本心から、心の底から、必要とされたことはなかった。
あんな重い言葉で託されたことはなかった。

赤の他人を彼らは信じたのだ。

そうだ、約束したんだ。

逃がせば、姉ちゃんを助けると。

俺は死んだのか？いいや生きている。

逃げることもできたのだ。

約束は守られた。

今度は俺の番だ。

「あの・・・」

赤石は声を出した。

静まり返った法廷内に必要以上響く。

全員が振り返る。

TVを観ている全国民が振り返る。

「まだ君の発言を許可していない。」
裁判長は冷たく言った。

「・・・・・・・・・・。」

「・・・なんだね。」

さすがに今回の異例の状況に裁判長は溜息をつき、折れて聞いてくれた。

大方、トイレとか、再度打ち合わせの確認などと思ったのか。

「・・・・・・・・・・あの・・・・・・・・・・。」

ゴクリと唾を飲み込む。

テツ達を指差して。

「・・・・・・・・・・本当の主犯は・・・実は俺なんです。だから、あの3人は悪くない。」

静寂。

呆れ顔のマスコミ陣、裁判長、検事、弁護士、傍聴席にいるSGMのメンバーや事務所の人間。

驚き顔の、テツ、サトシ、イクオ、そして、あのヒロでさえも。

「彼らは悪くない。俺が俺を誘拐しろと大谷に頼んだんだ。俺の自作自演です。」

同じく証人として呼ばれていた倉橋刑事が意味深にほんの一瞬だけ笑顔を見せた。

決して見下してはいない小さな笑み。

それを引き金として、法廷内は怒号と悲鳴、更には歓声で、かつてない混乱に襲われた。

つづく。

最終回 終わる前のマメ知識

赤石圭介の発言は当然の如く認められず、世間を呆れさせた。

・・とはいうものの、動機や、赤石を助け出そうとした行為などが考慮され、刑は比較的軽いものであった。

ヒロに至っては、無期懲役となり、最後まで黙秘を貫いた。

この裁判の一件で、赤石の人気は急速に落ちていき、SGMを脱退すると同じくして事務所も辞めることになり、以後消息不明となる。

SGMは4人で現在も活動しているが、赤石の抜けた穴は大きく、現実というものを感じるようになった。

大路公康はその後、数々の別件逮捕、再逮捕の繰り返しで、二度と社会に出ることはなかった。

倉橋刑事は、この事件の失態で、降格し、退職することになる。その後、探偵屋を開き、密かに大活躍しているという。

世間はそのまま事件を忘れていった。

数年後。

テツ、サトシ、イクオの出所が決まった時期に、謎の曲がローカルラジオ局から流れ始める。

家族の愛、兄弟の愛を歌ったこの曲は、瞬く間に大ヒットすることになり、S G Mが作り上げた当時の記録を全て塗り替えた。

作詞者、作曲者、歌っている者、不明。

最後までそれは世間に知られることはなかった。

3人の出所当日。

テツ、サトシを待っていたのは、手術を成功させたアケミの姿。イクオの前には、家族達。

そして、莫大なお金。

頼まれたと、お金を持ってきた人物がいた。

手術など全ての段取りも行った。

その人物は、探偵の倉橋と名乗った。

だが、お金の出所は倉橋ではない。

倉橋に頼んだ人間が別にいる。

それが誰なのかは、テツ達にはわかっていた。

このお金があのだ正体不明の大ヒット曲で稼いだお金だということも。

翌年、3人に葉書が届く。

ただ一言。

「約束は果たした。」

・・・とだけ書かれていた。

「全ての疑惑は目の前に」 完

読んでくれてありがとうございます。

最後まで読んでくれた方、途中で断念した方、最初から読んでない方も、皆ありがとうございます。

元々はこんな話じゃなかったです。

アイドルが誘拐されて、事務所は助けってくれず、しかも死んだことにされて、裏切られた。

怒ったそのアイドルは意気投合した誘拐犯とグループを組み、ステージへ乱入するという話が最初の企画です。

sonで、捕まって、数年後に、また歌を出して・・・という終わり方は同じですけど。

こんなに長くなるなんて思いもよらず、読者はわかってきているのだろうか・・・と。

まさに自己満足でした。

いかがでしたか？
また感想聞かせてください。

個人的には、変な所で辻褄があわなくなつて、無理矢理繋げた箇所が物凄いです。

例えば、身代金10億とかね。

結局復讐ならば、いくらでもいいやんって話ですからね。
テツ達の動機とかね。

そんなことしなくてもいいやんって感じですよ。

「全ての疑惑は目の前に」というタイトルは、大路や倉橋刑事、S
GM視点真犯人のことを示しています。

要所の頭文字から、全ての（S）、疑惑は（G）、目の前に（M）、
・・・とSGMになるようにタイトルを考えたのです。

これはSGMが最後まで関わってくるだろうということからなんです
が・・・。

全然関わってきませんでしたね。

最後の方、あいつら出てこなかったですよ。

あれだけ疑っていたのに、和解もさせられなかった。

真犯人に関しては、皆さんの予想通りかなと。

伏線張りすぎて、混乱してしまったこともあります。

でも・・・なんとか完結できました。

なので、あら探しはしないように！！

もし、見つけたらメール下さい。

こっそり直しておきますので。

小説はこれからも、どんどん書いていきますので、見捨てずによる

しく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7804a/>

全ての疑惑は目の前に

2010年10月10日01時38分発行